

II. 遺跡調査の概要

かめづか 亀塚遺跡

所在地 安城市東町秋葉下
(北緯34度55分11秒 東経137度5分54秒)

調査理由 中小河川改良工事(鹿乗川)

調査期間 平成28年11月～平成29年2月

調査面積 1,300㎡

担当者 永井宏幸



調査地点(1/2.5万「安城」)

調査の経過 調査は、中小河川改良工事事業(鹿乗川)にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、1,300㎡おこなった。関連事業として亀塚遺跡の発掘調査は今年度が初年度となる。なお、安城市教育委員会による発掘調査は、隣接地で3回実施されている。

立地と環境 遺跡は、碧海台地東縁辺下を南北方向に沿って流れる鹿乗川流域と遺跡の東方約1kmに流れる矢作川によって形成された沖積地に立地する。標高は現況8m前後である。

調査の概要 今回の調査区は安城市教育委員会による第1次調査(1973年)の実施された鹿乗幹線水路が隣接する。調査区は1ヶ所で、16A区として進めた。調査の結果、調査区の南北を河川あるいは後背湿地に囲まれた微高地上に展開する江戸時代以降を中心とする生産地関連の遺構群、さらに弥生時代中期後半までに埋没する河川跡を確認した。

江戸時代の遺構は、幅50cm前後、長さ5～10m、深さ30cm前後を測る溝群が2ヶ所と1列に並ぶピット群、長軸5m前後、深さ1m前後の大型土坑などがある。これらの遺構から出土する遺物は近世陶器類はなく、細片化した古墳時代前期を中心とする土器である。当初は古墳時代前期の遺構である可能性も想定した。ところが、調査区の北東隅と南側で確認した流路より中・近世の陶器類が出土した。遺跡の層序を検討した結果、これら流路と同時期あるいはそれ以降の遺構であると判断し、江戸時代以降とした。

溝群は、両者ともに北西から南東の方向に隙間なく重複する配置が見て取れる。これら以外の溝も概ね同一の方向かあるいは直交する方向の溝が多い。密集して重複する溝群は、畑の畝立ち溝を想定した。大型土坑の掘り込みが湧水層に達していることから、野井戸など水を貯め置きする施設の可能性がある。これらの遺構は砂質シルト層と砂層の互層に掘り込まれている。この層直上は近代以降の耕作土によって削平されている。

遺構を確認した砂質シルト層と砂層の互層は流路と推定して調査を進めていた。江戸時代以降の遺構群の調査に併行しながら、調査区内に十文字のトレンチを設定し下層の状況を探った。この十文字のトレンチと調査区壁トレンチの断面から、調査区を南北に縦断する流路群であると判断した。そのうち、もっとも新しい流路はシルト層が流路中心部分に堆積する。このシルト層は大型土坑に南接する位置から始まり、十文字にトレンチが交差するあたりをとおり、弥生時代中期末の細頸壺が出土するあたりへ続く。流路は堆積状況と細頸壺の出土から、弥生時代中期末までに埋没したと思われる。

まとめ 今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にいたる亀塚遺跡の中心となる遺構・遺物が少なかった。ただ、弥生時代中期末頃までにはこの付近に微高地が形成されたことが流路の埋没時期から判明し、亀塚遺跡の始まりをかんがえる上で大きな成果を得た。

(永井宏幸)



写真1 稲架?の柱列



写真2 江戸時代以降の流路



写真3 大型土坑(野井戸?)



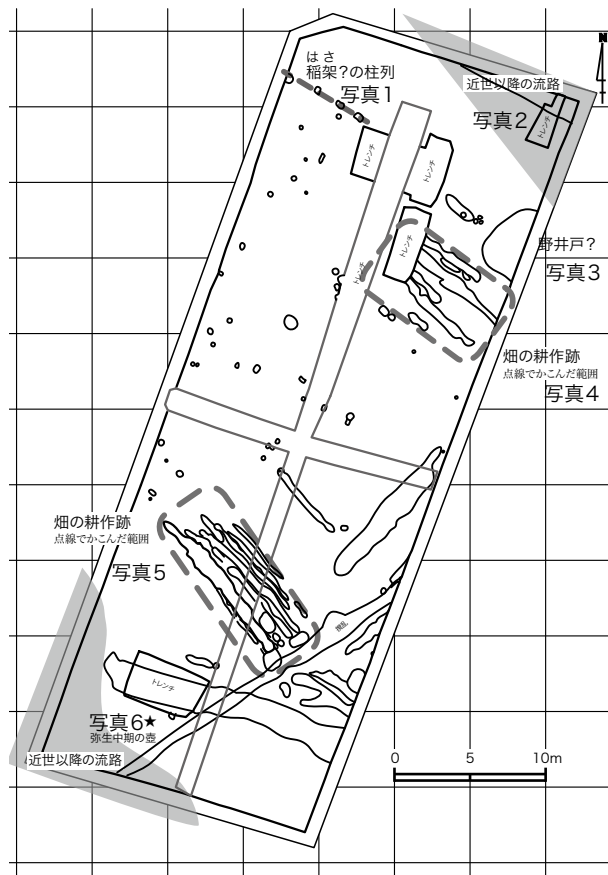
写真4 畑の耕作跡



写真5 畑の耕作跡



写真6 弥生時代中期末細頸壺



16A区遺構全体図 (S=1/500)

しもかけ よせじま
下懸・寄島遺跡

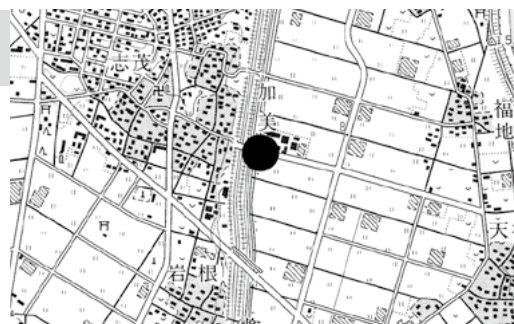
所在地 安城市小川町向田
(北緯34度54分26秒 東経137度05分42秒)

調査理由 中小河川改良工事(鹿乗川)

調査期間 平成29年1月～2月

調査面積 720㎡

担当者 永井宏幸



調査地点(1/2.5万「安城」)

調査の経過 調査は、中小河川改良工事事業(鹿乗川)にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、下懸遺跡(252㎡)と寄島遺跡(468㎡)にまたぐ調査区で720㎡おこなった。

立地と環境 遺跡は、碧海台地東縁辺下を南北方向に沿って流れる鹿乗川流域と遺跡の東方約1kmに流れる矢作川によって形成された沖積地に立地する。標高は現況8m前後である。

調査の概要 今回の調査は、昨年度の下懸遺跡調査区の西側、2011年度調査区の南西側に位置する。現在工事が進められている橋梁工事のなか調査を進めた。調査区は、鹿乗川と用水の間に位置する堤防部分を対象に設置した。調査の結果、寄島遺跡2011年度11A・B区にまたがる003NRの一部である河道跡が確認された。

河道跡001NRは調査区全域にまたがり確認され、黒色土の確認された止水性の堆積部分は35m以上に及ぶ。断面観察より、この黒色土は3つの平坦面をもつがわかった。南端の河道岸寄りには大量の土器を含む約4mほどの平坦面(下懸遺跡)、その北側(寄島遺跡)に少し畦状の高まりから一段下がり、15mほどの平坦面、さらに北側へ10m前後の平坦面が確認された。これら平坦面の最下位層に黒色土と腐植土層が堆積し、遺物包含層を形成している。河道底面の一部であるが、人工的な加工面の可能性もある。だとすれば、河道縁辺に設置された水田など耕作地の可能性もある。今回は面的な確認はできなかったが、2011年度の調査では、河道跡の最上層は古代～中世の水田跡が検出されている。

河道跡の南寄り(下懸遺跡)の遺物集積は、弥生時代終末期から古墳時代前期を中心とする土器が出土している。この遺物集積は2011年の調査区とよく似た状況であり、50m以上続く遺物集積帯であろうか。なお、北寄り(寄島遺跡)の平坦面は土器類の出土は少なく、自然木を含め建築部材と思われる大型木製品が数点出土した。

(永井宏幸)



調査区全景(北から)



下懸遺跡側の河道跡遺物集積(北から)

おかやまみなみ

岡山南遺跡

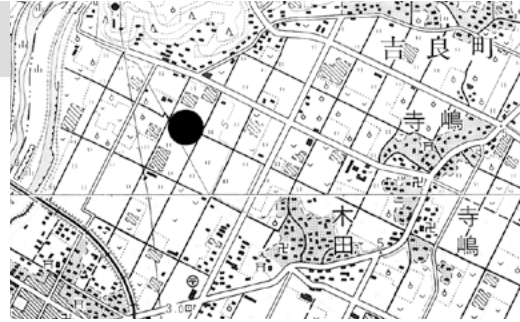
所在地 西尾市吉良町木田
(北緯34度50分15秒 東経137度04分38秒)

調査理由 道路改良工事西尾幡豆線

調査期間 平成28年8月～12月

調査面積 3,970㎡

担当者 鈴木正貴・武部真木



調査地点 (1/2.5万「西尾」)

調査の経過 調査は県道西尾幡豆線建設に伴い、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。これまでに平成23・24・27年度に本調査および範囲確認調査が行われており、今年度調査範囲には遺跡の西端付近が含まれる。西側からA,B,C,D,Eの5区を設定して行った。

立地と環境 遺跡は西尾市域の中央を流れる矢作古川左岸域に位置する。中根山遺跡をはじめとする弥生時代の集落遺跡、若宮1号墳などの古墳がある丘陵の南側に広がる標高3.5m前後の沖積地に立地する。これまでの調査により、弥生時代土器のほか、古墳時代・古代・近世の遺構が確認されている。

調査の概要 今回の調査では、自然流路から木製品と加工材、古墳時代土器が出土したほか、主にC区東半からE区西半の間の微高地部分において、古墳時代の土坑・溝、古代と推定される竪穴建物・土坑・溝を確認した。近世以降では、A・B区など遺跡の西端付近にかけての範囲で井戸・土坑・溝(耕作痕)が明瞭にみられた。

まずC区西端では古墳時代以前となる下層において、木製品等を含む自然流路を確認した。製品では装飾的な加工のある部材や鎌の柄などがあり、他にも板材や角柱状の加工材が多数の流木に混在して出土する。B区堆積状況と併せて、これらはやや大きな流路の左岸付近に集積したものと考えられる。

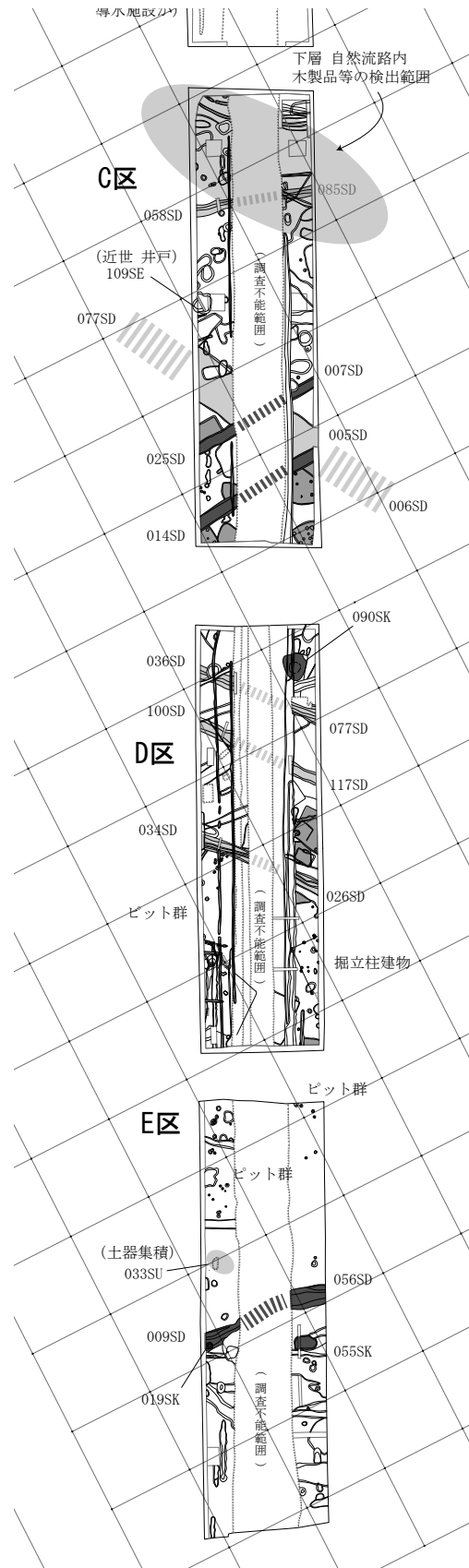
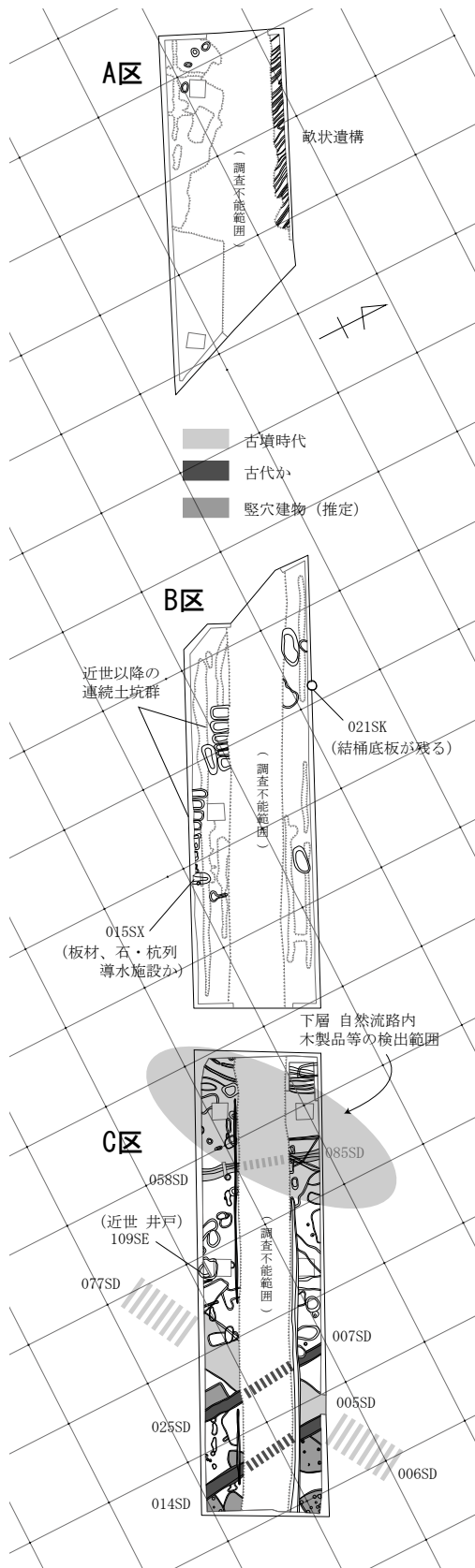
古墳時代の溝は概ね北東から南西方向となり、流路に影響を受けた自然地形に沿うものが多く、C・D区にかけての範囲でみられる。C区006-077SDは幅約5m、深さは約30cmと浅いものの、粘土質の堆積層に多数の土器片が含まれている。C区085-058SDや、D区026-034SDなどは、時期は判然としないものの、断面上端が幅広で下位にかけて急激に細くなる特徴が共通する。なお、自然流路の埋土中の遺物集積として扱ったE区033SUは4世紀を中心とした時期にまとまりがあり、この時期には微高地が安定し利用が始まっていたと考えられる。

古代の遺構は、D・E区で7世紀の遺物を含む土坑、溝が検出されたほか、C区006SD・077SD、D区掘立柱建物など配列がほぼ正方位をとるものがある。竪穴建物については、ピットや遺存状況も浅く不安定であり、カマド跡も検出されていないため、今後再検討が必要と思われる。ただし、C区中央以東からE区西端にかけての範囲では一部では包含層が確認されており、古代にも利用可能な微高地が存在した可能性は高いと思われる。

ま と め

少なくとも古墳時代中期には丘陵部の「岡山」だけではなく、低地部にある本遺跡近辺の微高地が利用されるようになり、木製品等の加工も行われるような集落が存在した。古代には区画の再編を伴うような開発が行われたと考えられる。

(武部真木)



16A,B,C,D,E 区主要遺構配置図 (S=1/800)



16A～E区遠景（北東より）



E区 033SU 遺物出土状況



C区下層流路 流木等出土状況



C区下層流路 木製品出土状況



C区 077SD 遺物出土状態



E区 019SK 遺物出土状態



C区 109SE 墨書のある結桶



D区 090SK 断面

にしじ ひがしじ
西地・東地遺跡

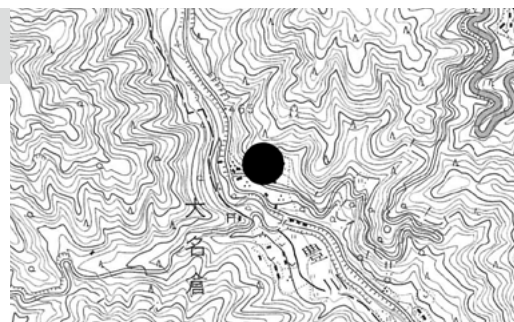
所在地 北設楽郡設楽町大名倉字西地、東地
(北緯35度6分41秒 東経137度32分37秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年10月～12月

調査面積 340㎡

担当者 樋上 昇・川添和暁



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成28年10月から12月にかけて実施した。調査対象範囲は平成26年度調査14B区と14C区の間にある町道部分で、面積は340㎡である。

立地と環境 遺跡は標高約450m、寒狭川左岸の山麓緩傾斜地および河岸段丘面上に立地する。当地は大名倉地区の北西端にあたり、寒狭川で解析された谷地形が開け始める地点に位置する。寒狭川の対岸側には、昭和43(1968)年、早稲田大学の調査により縄文時代後期の遺物が多く出土した、大名倉遺跡が位置する。

調査の概要 遺構・遺物は調査区中央を中心に確認された。調査は、縄文時代と中世以降の、大きく2時期に分けて行った。

縄文時代 縄文時代の遺構としては、土坑群・ピットが確認された。北側中央の高位部分を中心に径1m以上を有する大型の土坑が10基ほど集中して確認された。大型の土坑内には台石などや大きな礫が多量に含まれており、154SK・266SK・310SKでは、掘り方に沿って板石などが検出された。これら礫の一部には被熱痕がみとめられる。121SKも、埋土内に板石などが多量にみつかった土坑であるが、炭化種実(堅果類)も確認されたことから、貯蔵穴であったと考えられる。165SKと303SKは西側の低位部分で重複して見つかった大型土坑

貯蔵穴 である。165SKは上層の浅い皿状堆積を呈する土坑で、熔結凝灰岩の石核が見つかったほか、中央の凹みに向かって大きな台石や被熱礫、土器底部などが出土した。303SKは、より大きな掘り方を有する下層の土坑で、土器のほか礫が多く出土した。

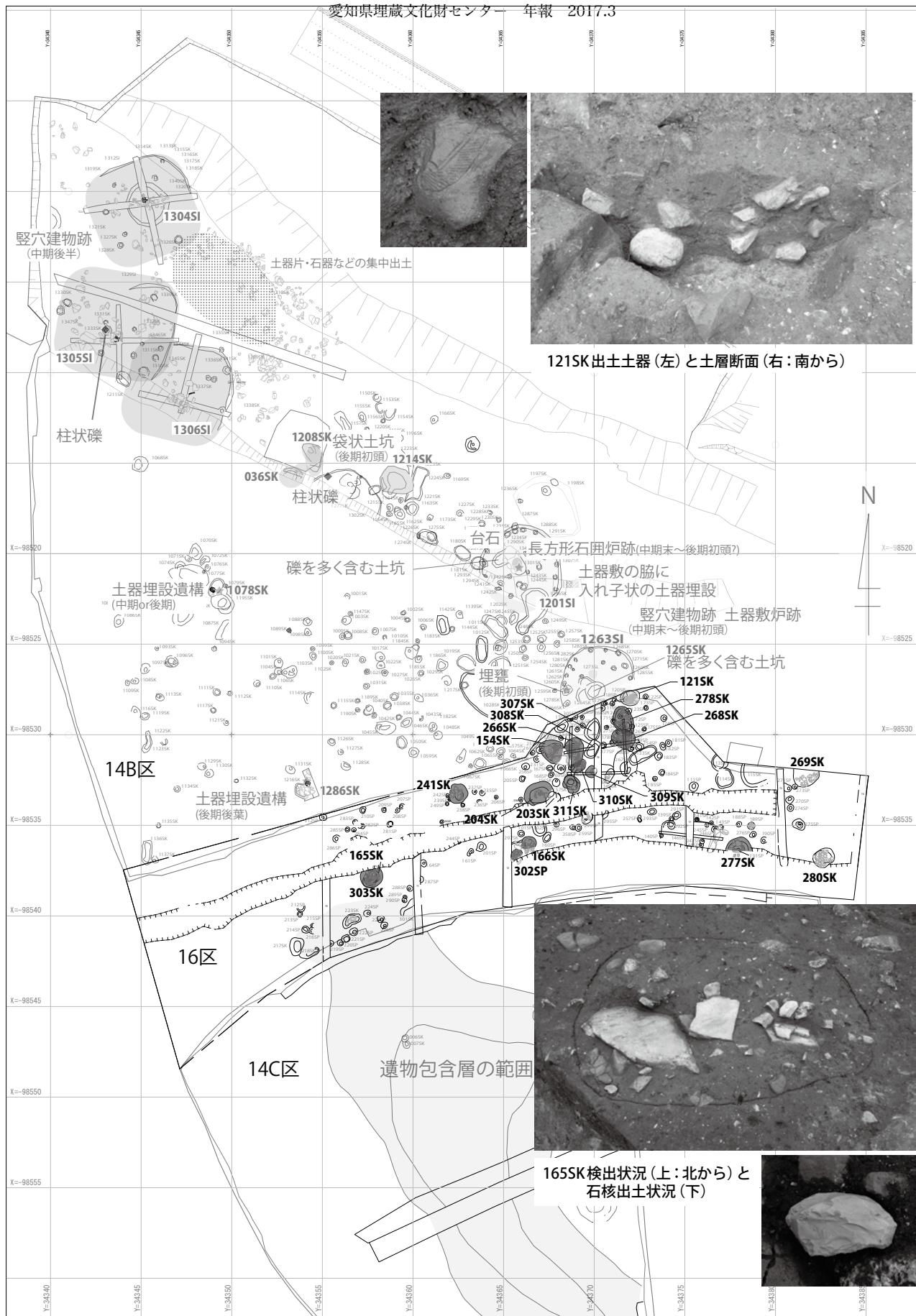
中世以降 調査区北側の、縄文時代的大型土坑群分布域の西側で、中世以降の遺構・遺物が多く見つかった。遺構には、竪穴状遺構・土坑・ピットがある。061SXは1辺5mほどの不定形な落ち込みとして検出されたが、調査によって重複関係をもった2基の竪穴状遺構であることが明らかとなった。掘り方の周囲内外にはピット列が認められた。中央には炉跡などの

鉄 滓 痕跡は確認されなかったものの、焼土粒や炭化物を含む埋土内から鉄滓が出土した。調査区北西端でも、長径1mほどの浅い土坑(253SK)内から鉄滓が出土した。

出土遺物 縄文時代の出土遺物には、土器・石器・石製品がある。土器は縄文時代後期初頭が主体で、早期後半や中期後半のものも若干含まれる。石器では、石鏃・尖頭器・スクレイパーのほか、磨石敲石類と石皿台石類が多く出土した。中世以降では、古瀬戸後期の天目茶碗や平碗のほか、常滑甕や砥石、銅銭などが出土した。

まとめ 今回の調査で、14B区で見つかった遺構とあわせての縄文時代集落跡全体の様子が明らかとなった。16区は、後期初頭の貯蔵穴を含む大型土坑群の分布域であったことが明らかとなり、集落景観を考える上で、重要な調査事例となったといえる。

(川添和暁)



西地・東地遺跡縄文時代遺構位置図 (S=1/300) 【マス目は5m】

おおぐり 大栗遺跡

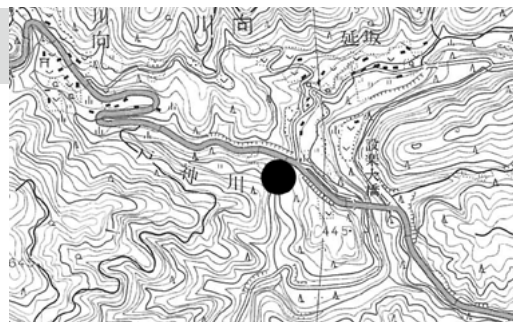
所在地 北設楽郡設楽町川向地内
(北緯35度6分39秒 東経137度33分53秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年9月～12月

調査面積 3,190㎡

担当者 樋上 昇・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。

立地と環境 大栗遺跡は戸神川左岸の南西向き傾斜面に立地する。標高は403mを傾斜変換点として、それより北東は急傾斜面、南西は緩斜面となる。標高408m付近には狭い平場があり、かつては宅地や墓地として利用されていた。

調査の概要 平成27年度には今回の調査区の西側を発掘調査しており、緩斜面で縄文時代早期から弥生時代前期の遺物が出土している。また北東側の平場では戦国時代から近代の遺構を確認している。

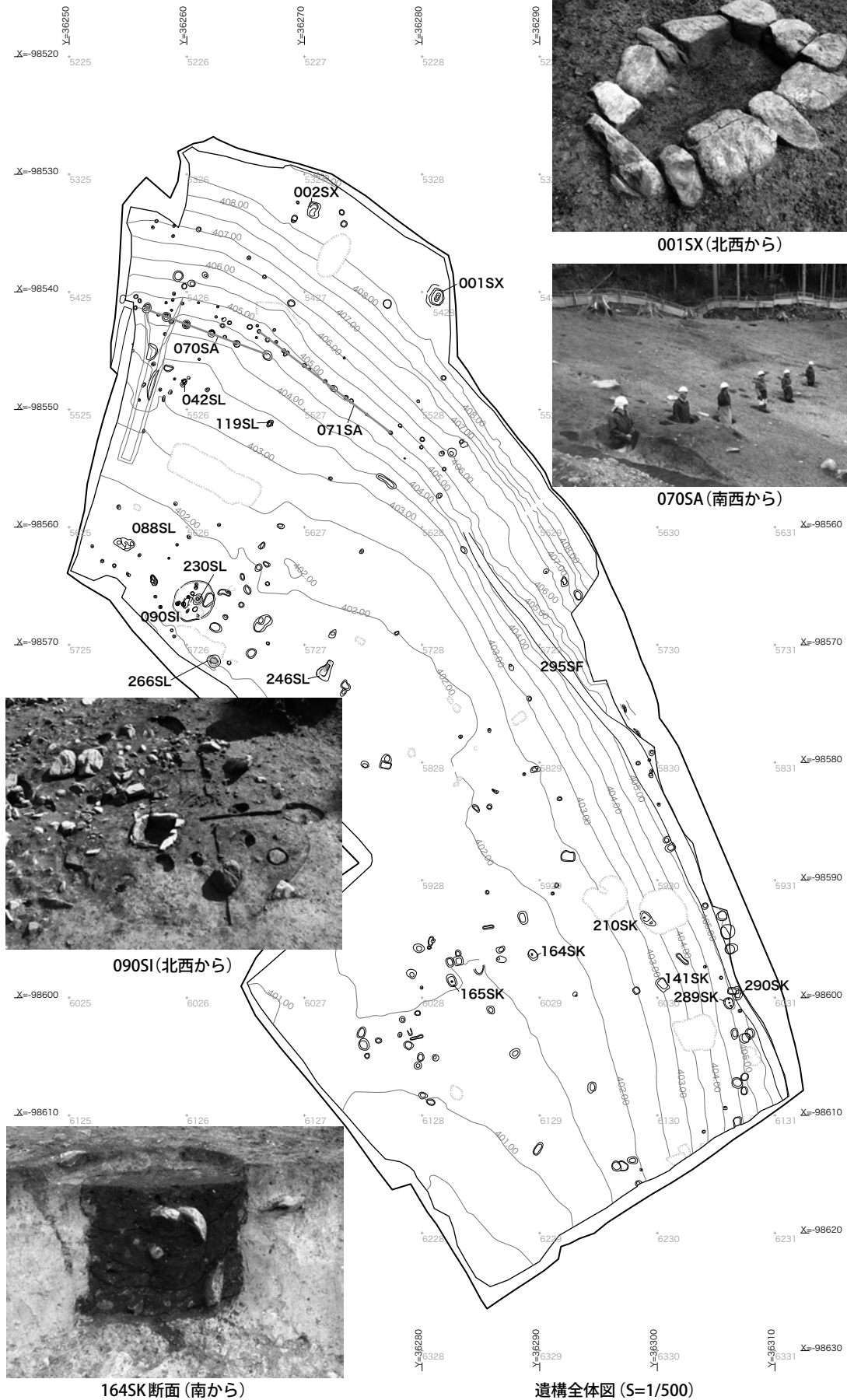
今年度は、緩斜面地の北西端付近で縄文時代中期の竪穴建物1棟(090SI)のほか、縄文時代早期の煙道付炉穴(246SL)と集石炉(266SL)、調査区南半部では急傾斜面から緩斜面にかけて6基の陥し穴(141・164・165・210・289・290SK)を確認した。

また、調査区北東部付近では平場で近世以降の石組み遺構001SX、急傾斜面で2条の柵列(070・071SA)を検出した。

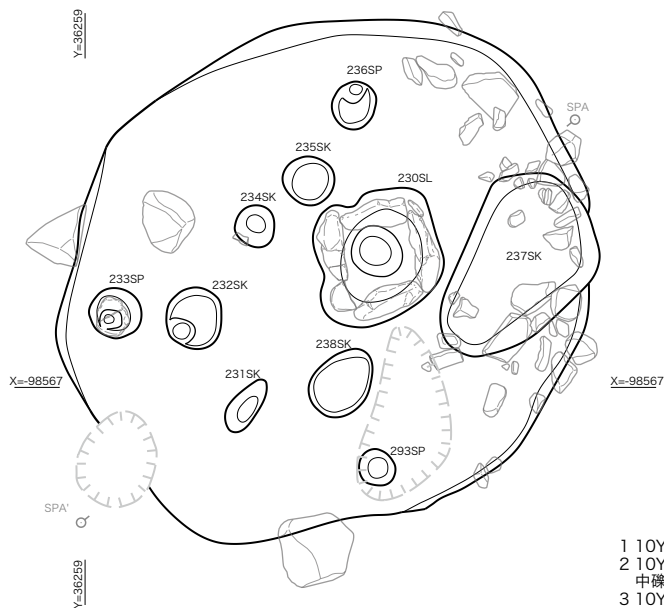
(樋上 昇)



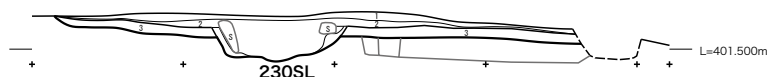
16B・C区全景



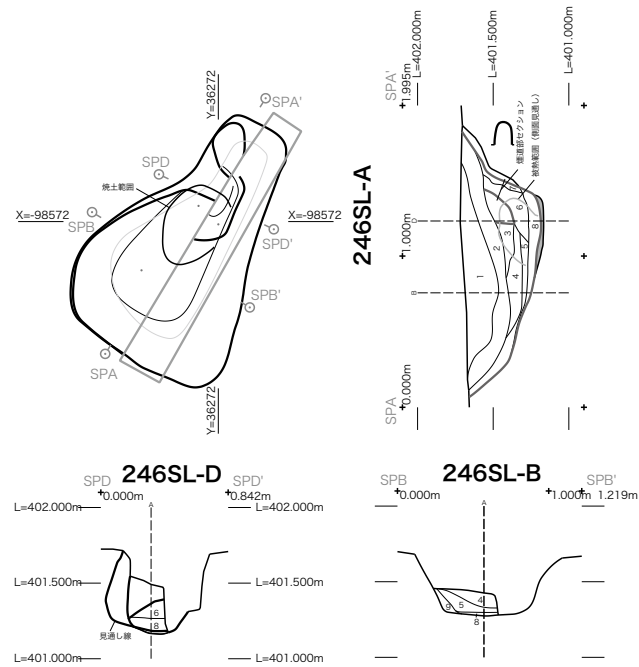
090SI



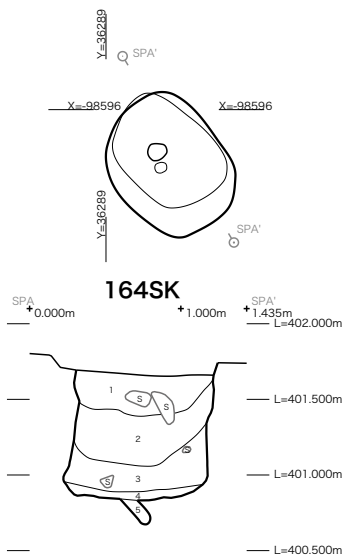
090SI



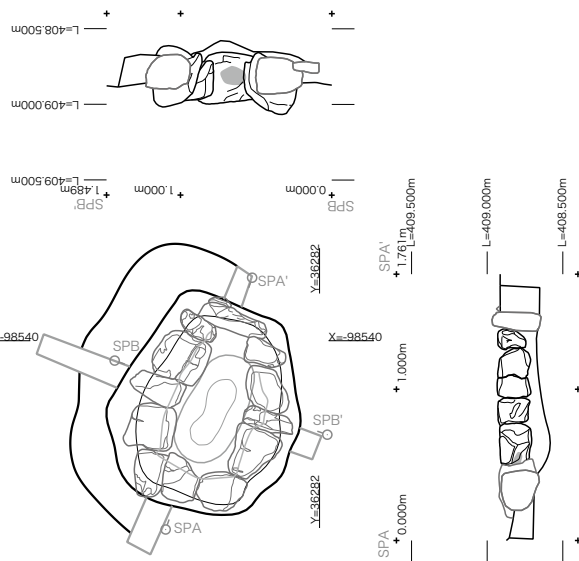
- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト やや粘質 粗砂、細礫含む。耕作土
2 10YR5/1 褐灰色 シルト やや粘質 中粒砂 黄褐色 シルトブロックを少量含む。
炭を含む。(覆土)
3 10YR5/4 黒褐色 シルト やや粘質 粗砂含む。(床層)



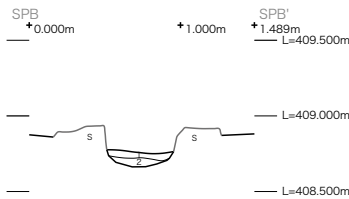
- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト やや粘質 粗砂 中礫の亜角礫を多く含む。
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト やや粘質 粗砂を含む。
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト やや粘質 細砂多く含む。
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト やや粘質 極粗砂、細礫含む。
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト やや粘質 礫、炭、焼土含む。
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘質 細礫含む。
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘質 粗砂含む。
- 8 10YR5/6 黄褐色 シルト やや粘質 炭、焼土含む。
- 9 10YR5/6 黄褐色 シルト やや粘質 細礫含む。



- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト やや粘質 粗砂を含む。径20cmの大礫の亜角礫あり。
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト やや粘質 粗砂、黄褐色 シルトブロックを少量含む、
中礫の亜角礫を含む。
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト や粘質 粗砂を含み、黄褐色 シルトブロックを多く含む。
径20cmの大礫の亜角礫を含む。
- 4 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘質 粗砂、黄褐色 シルトブロックを含む。
- 5 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘質 粗砂を含み、黄褐色 シルトブロックを少量含む。



001SX



- 1 10YR4/4 褐色 粘質土 (10YR2/1 黒色炭化物を含む)
2 10YR3/3 暗褐色 粘質土



A horizontal number line segment from 0 to 1m. The segment is divided into 50 equal parts by tick marks. Below the line, the text $(S=1/50)$ is written.

個別遺構図 (S=1/50)

かわむぎひがしがいつ

川向東貝津遺跡

所在地 北設楽郡設楽町川向地内
(北緯35度6分26秒 東経137度33分54秒)

調査理由 設楽ダム建設

調査期間 平成28年5月～9月

調査面積 810㎡

担当者 樋上 昇・武部真木



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。

立地と環境 川向東貝津遺跡は豊川の支流、境川右岸の河岸段丘上に立地する。遺構検出面での標高は374～376mを測り、東から西に向かって緩やかに傾斜している。近世以降には、石垣で区切られた5段の平坦面からなる棚田に改変されており、さらに1950年代には水田が放棄されて杉の植林がおこなわれている。

調査の概要 平成27年度の調査では、縄文時代中期の竪穴建物跡と集石土坑などを検出した。その際、下面遺構として後期旧石器時代と縄文時代草創期の石器集中区を検出したため、その範囲810㎡を本年度に改めて調査することとなった。

調査区北西端と南西端の2ヶ所に石器集中区があり、前者は後期旧石器時代から縄文時代後・晩期までの石器が混在する。いっぽう後者は縄文時代草創期と後期旧石器時代の石器群が層位的にほぼ混在することなく出土している。なかでも縄文時代草創期は、20点を超える尖頭器の出土が目される。

(樋上 昇)



調査区全景(北西から)



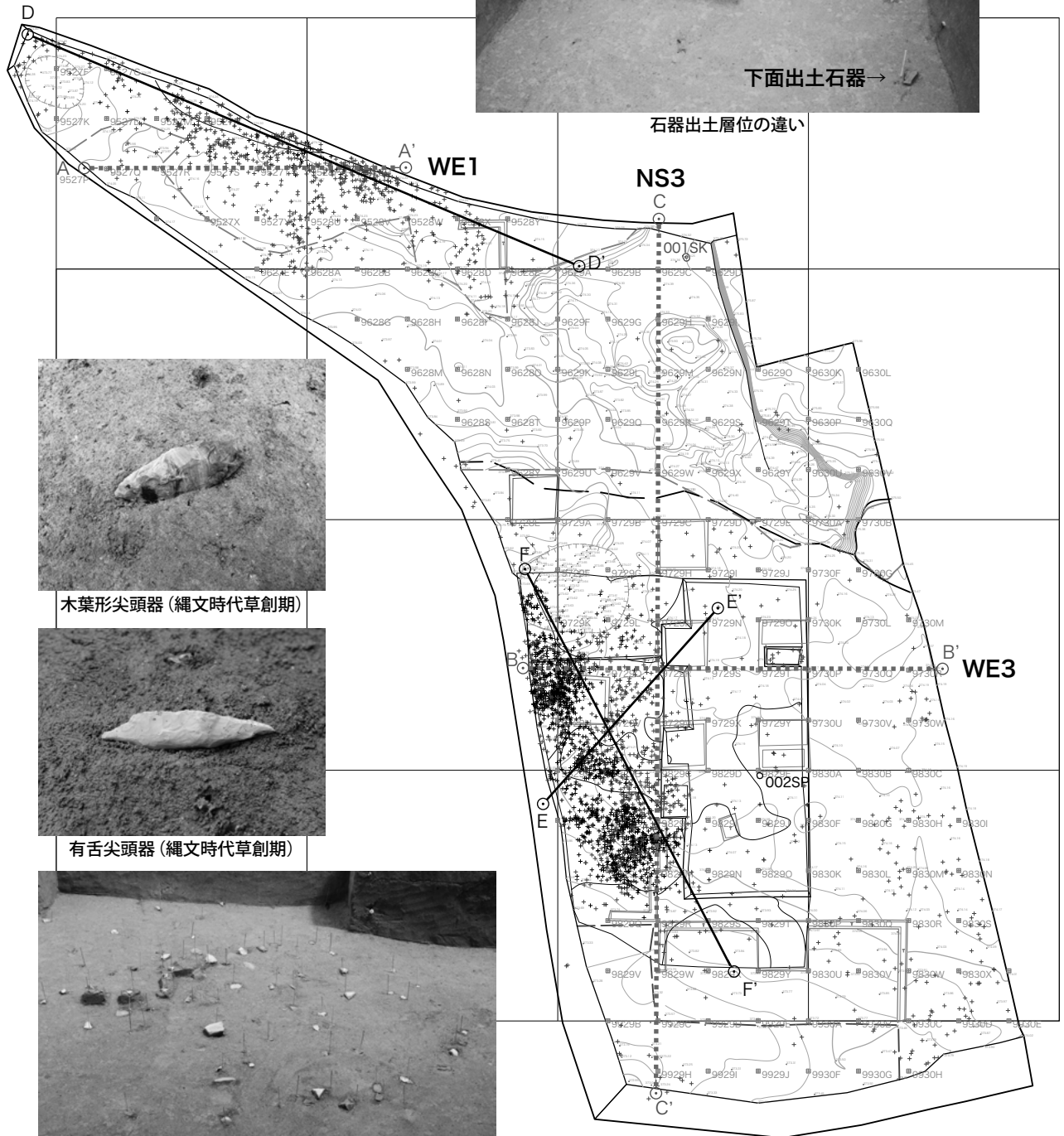
下面完掘状況(北より)



← 上面出土石器

下面出土石器 →

石器出土層位の違い



木葉形尖頭器(縄文時代草創期)

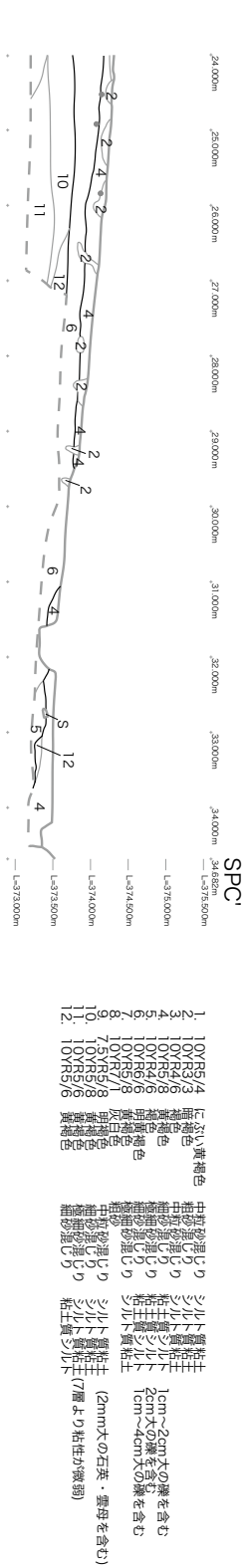
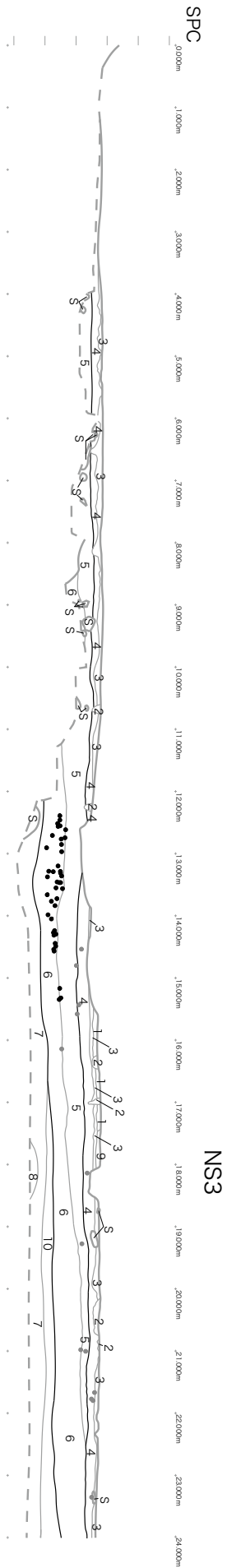
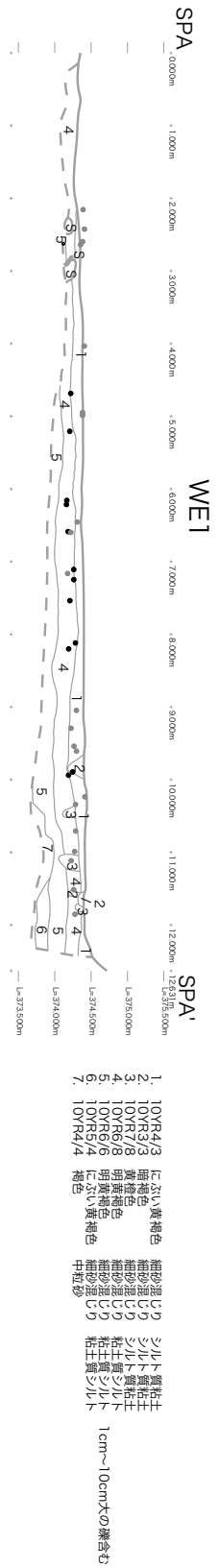


有舌尖頭器(縄文時代草創期)



下面石器群出土状況(後期旧石器時代)

遺構全体図 (S=1/250)
※ 薄いトーンは上面(縄文時代草創期)
濃いトーンは下面(後期旧石器時代の石器群)



土層断面図 (S=1/100)

たきせ
滝瀬遺跡

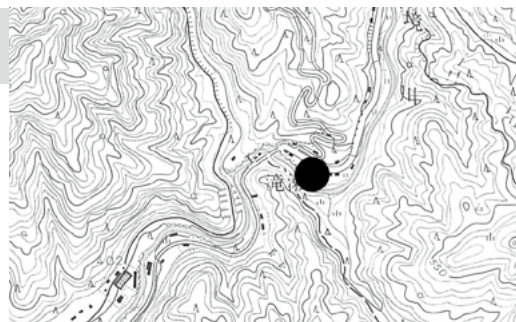
所在地 北設楽郡設楽町八橋字タキセ
(北緯35度7分10秒 東経137度34分55秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年4月～11月

調査面積 5,520㎡

担当者 川添和暁・早野浩二



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成28年4月から11月にかけて実施された。調査対象範囲は、県道10号線の南側、平成27年度調査15区の周囲である。

立地と環境 遺跡は標高約425m、境川北岸の山麓緩傾斜地および河岸段丘面上に立地する。当地は北流する境川が大きく蛇行し、南側から沢が合流する地点で、境川に対して舌状に張り出した南向きの緩斜面となっている。遺跡内には、旧伊那街道が通っていたことが知られており、調査区外の街道脇の石垣には旅人によって描かれたという「落書き石」があった。

調査の概要 調査では15区を挟んで、東側にA区・西側にB区を設定した。調査の都合上、B区をさらにBa区・Bb区・Bc区・Bd区の4区に分けることとなった。

見つかった遺構・遺物の時代は、縄文時代・古墳時代初頭・中世・近世以降で、疎密はあるものの、縄文時代の遺構・遺物が調査区全体で見つかった。以下、調査区別に概要を報告する。

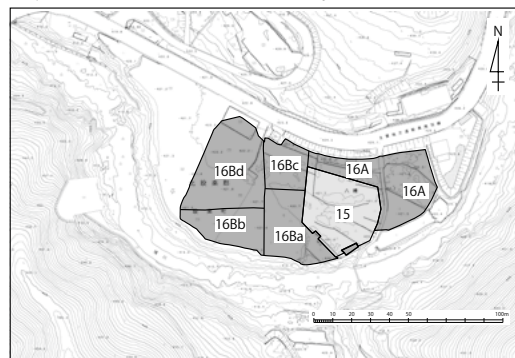
A 区 15区の北側および東側に接して設けられた調査区である。調査前の地形は、南側に向かって三段の水田などの耕作地となっており、A区の中央(15区東端)には、旧伊那街道が畦道状に造成されていた。耕作地の造営による削平もあったためか、各段の川側に当たる下手(南側)で、遺構・遺物は良好に確認された。遺構・包含層からは、縄文時代早期・中期後半・後期前葉～中葉・中世・近世以降の遺物が出土した。

縄文早期 縄文時代早期の遺物は、調査区北東端の黒色土下でややまとまって見つかった。出土土器はポジティブな楕円押型文土器であり、トロトロ石器も1点した。トロトロ石器はチャート製で、長さ35mm・幅26mm・厚さ6mm、研磨や磨滅などにより両平面の中央稜線は鈍くなっている。なお、側面の稜線は鋭いままである。

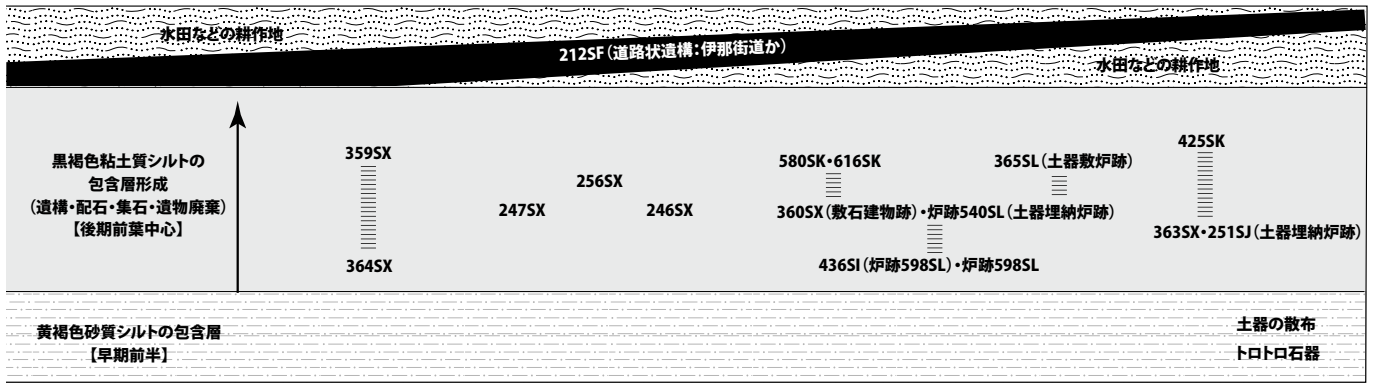
縄文中期 縄文時代中期後半の遺構として、竪穴建物跡(201SI・215SI)と、土坑(315SK)が調査された。201SIと215SIは重複関係にあり、201SIが後のものである。両者とも軸が5m

竪穴建物跡 弱の、平面プラン五角形を呈するもので、四隅に支柱穴を持つ。201SIの中央には、4辺を大きな板石で囲む石囲炉跡(205SL)が認められた。土坑315SKは、調査区中央の段差際で見つかった。遺構内からは中期後半の土器片がまとまって出土した。

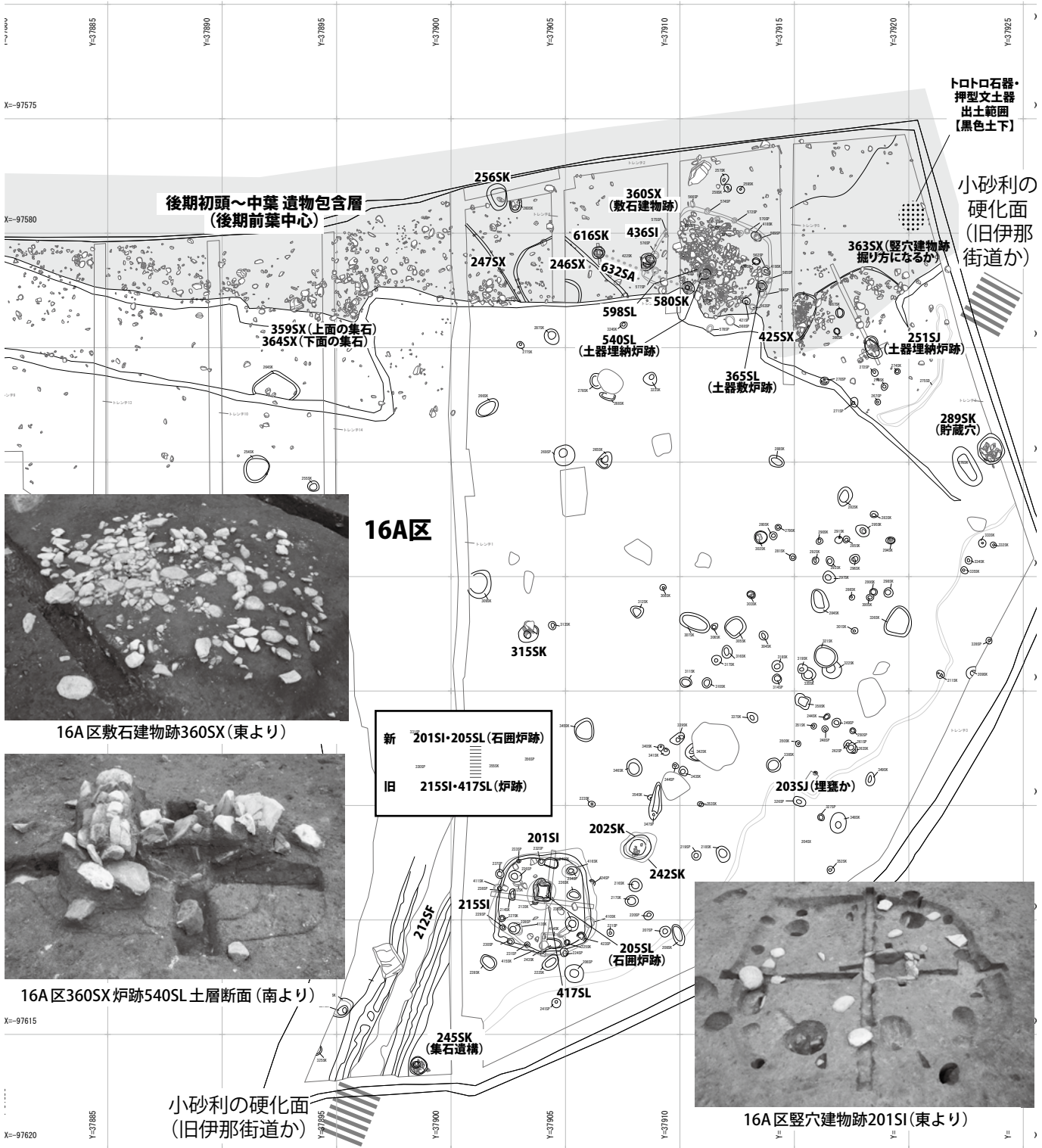
縄文後期 今年度の調査では、縄文時代後期前葉～中葉の遺構・遺物が最もまとま



調査区位置図 (1:4,000)



16A区 北東端 遺構など重複関係模式図 (破線による上下は切り合いなどで新旧関係が確認されているもの)



16A区北東端遺構など重複関係図 (上) と16A区遺構位置図 (1:250) (下) 【マス目は5m】

っている。確認された遺構としては、敷石建物跡1棟(360SX・炉跡540SL)、竪穴建物跡2棟(363SX・炉跡251SJ、436SI・炉跡598SL)、貯蔵穴1基(289SK)、その他土坑3基(202SK[242SK]・256SK・425SX)、土器埋設遺構1基(203SJ)、建物跡との関係が確認できなかった土器敷炉跡1基(365SL)、および遺物包含層である。遺物包含層である黒褐色粘質シルト層は、特に調査区北端で40×8mの範囲に渡り、良好に残存していた。ここで見つかった遺物包含層は、土器片・石器や剥片石核類を多量に包含する上、247SX・364SX・359SXなど配石遺構あるいは集石遺構を含むことから、人為的作用によって壘重して形成されていたものと考えられる。

敷石建物跡 敷石建物跡360SXは、遺物包含層である黒褐色粘土質シルト中に形成されたもので、床面と炉跡・ピットが検出された。礫の配された(配石)範囲は、480cm×440cmに及び、中には主軸を形成する幅50cmほどの石列が、北東-南西方向に認められる。この配石の様子は北西側4分の1と、南西側4分の1、さらには東側2分の1で、それぞれ様相が異なる。北東側は、敷石の重複が著しく、最大3重に渡り壘重する様子が確認された。東側も部分的に2重の重なりが認められるところもあるが、中央を基点として環状に配されている様子が特徴的に認められる。一方、南西側は配石の形成自体が著しくなかった。調査を進めたところ、若干ではあるが、配石の周囲でピットが確認され、中央からは土器埋納炉跡(504SL)も見つかった。周囲の遺物土器は後期前葉を主体とし、黒曜石の剥片石核類や大型石棒片も見つかった。なお、この敷石建物跡は、先行する竪穴建物跡(436SI)に重複して築かれていた。436SIの埋土は黒色を呈した炭化物・焼土を多く含む黒褐色粘土質シルト層であり、この層中に360SXの床面に当たる配石が確認された。

竪穴建物跡 敷石建物跡360SXの東側では、土器埋納炉跡(251SJ)に伴う落ち込み(363SX)を確認しており、これも竪穴建物跡である可能性が考えられる。また、360SXの床面より若干上位レベルで、土器敷炉跡(365SL)が確認された。これも竪穴建物跡に伴うものであるならば、当地は繰り返し居住が行われた場所であったと考えられる。その一方で、長軸2m×短軸1mほどの長方形の土坑も見つかっている。遺構検出面では礫が多量に認められたもので、遺構底面からは注口土器の注口部が出土した。形状から土坑墓であった可能性が考えられる。

貯蔵穴 調査時に黒褐色の遺物包含層が残存していないところでも、縄文時代後期の遺構が確認された。289SKは径1mほどの遺構である。断面の一部が袋状を呈することと、掘り込みの重複が認められること、さらには堅果類と考えられる炭化種実が出土したことから、貯蔵穴と考えられるものである。203SJは調査区南側で見つかった、土器埋設遺構である。立位で埋納された深鉢底部付近しか残存しておらず、埋設当時の状況を勘案すると、少なくとも30cmは以上は削平されたものと想定され、本来は埋甕であった可能性がある。202SKと242Kは径1mほどの重複して見つかった土坑で、元々は貯蔵穴であった可能性がある。遺構底面からは礫のほか、土器片・擦切具・大型の砥石・台石がまとまって出土した。

16A区出土遺物 その他16A区での縄文時代の出土遺物には、縄文土器のほか、石鏃・スクレイパー・打製石斧・礫器・打欠石錘・有溝石錘・磨石敲石類・石皿台石類がある。石鏃など小型剥片石器に関連する黒曜石などの剥片石核類がある一方で、打製石斧・刃器などの大型剥片石器に関連する安山岩の剥片石核類が多量に出土した。

近世以降 16A区の南端では、近世以降の道路状遺構も見つかった。最大で幅2.5mの溝状を呈するもので、長さ約7mに渡る。両端には溝状の落ち込みがあり、その間には小砂利が敷き

伊那街道

詰められており、極めて固くしまっていた。この場所は、調査前に認識された旧伊那街道と重複した関係で見つかり、さらに前段階の伊那街道であった可能性が高い。調査区東壁の北側にも小砂利が敷かれた凹みが存在しており、かつては16A区内を横断するように街道が走っていたものと考えられる。

16B区

16B区でも縄文時代早期～後期中葉の遺構・遺物が見つかり、残存状況は散発的であった。土器の出土は希少である一方、大型剥片石器に対応する安山岩の剥片石核類は調査区全体で広く出土した。

集石土坑

16Ba区では、縄文時代早期後半の土坑(427SK)や、中期後半の土坑(431SK)が調査された。その他、集石土坑(432SK・475SK)も確認された。

黒曜石の集中出土

16Bb区では、境川へと続く谷地形の肩部分では、土器片とともに黒曜石剥片が100点ほど集中して出土した。石器の調整などを行った作業場として利用されたかもしれない。

土器埋設炉跡?

16Bc区では、調査区中央で、古墳時代初頭の遺物がまとまって出土する遺構(361SX)を確認した。

16Bd区では、時期など不詳であるが、土器埋設炉跡の可能性のある遺構(622SL)が見つかった。

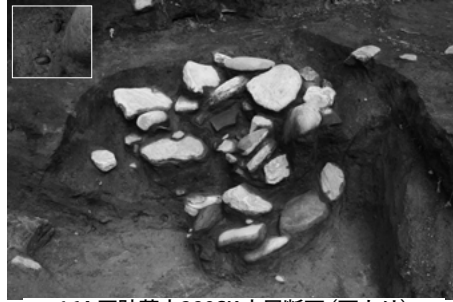
ま と め

今回の調査で、縄文時代中期後半以前の遺構・遺物が見つかる黄褐色砂質シルトと、後期前葉から中葉の黒褐色粘土質シルト(遺物包含層)との層序関係を確認することができた。特に、16A区で見つかった遺物包含層は、当時の廃棄行為・配石や集石行為・埋葬行為・さらには竪穴建物跡などの居住活動などが重複して行われた結果、形成されたものであった。換言すると、この包含層自体、遺構の複合体として考えるべきものである。縄文時代後晩期の遺跡調査において、このような遺物包含層は貴重な情報を多く含む結果であることが、改めて認識させられるものとなった。その上で、今回の調査で見つかった敷石建物跡は、関東・東海東部・中部高地との関連性を考える上で、貴重な調査事例となった。

(川添和暁)



16A区土坑202SK遺物出土状況(南東より)
左上は擦切具出土状況



16A区貯蔵穴289SK土層断面(西より)
左上は炭化種実出土状況



16A区土器埋納炉跡251SJ土層断面(南より)



16A区トロトロ石器出土状況



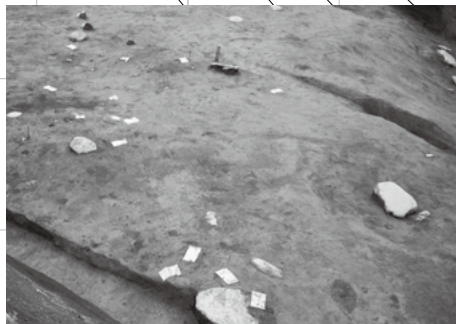
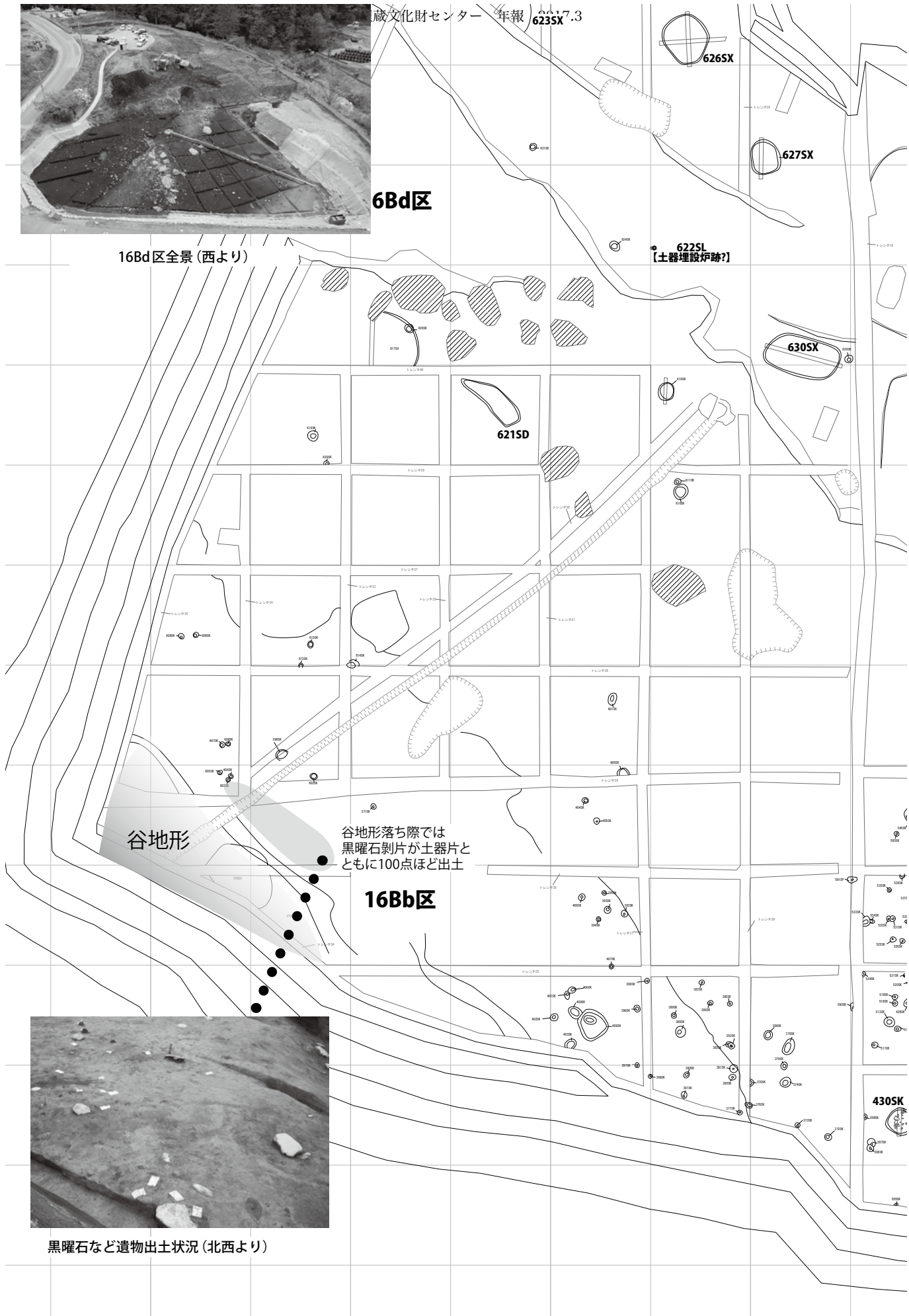
16A区道路状遺構212SF(北西より)



蔵文化財センター 年報 623SX 7.3

6Bd区

16Bd区全景 (西より)



黒曜石など遺物出土状況 (北西より)

Y=37765

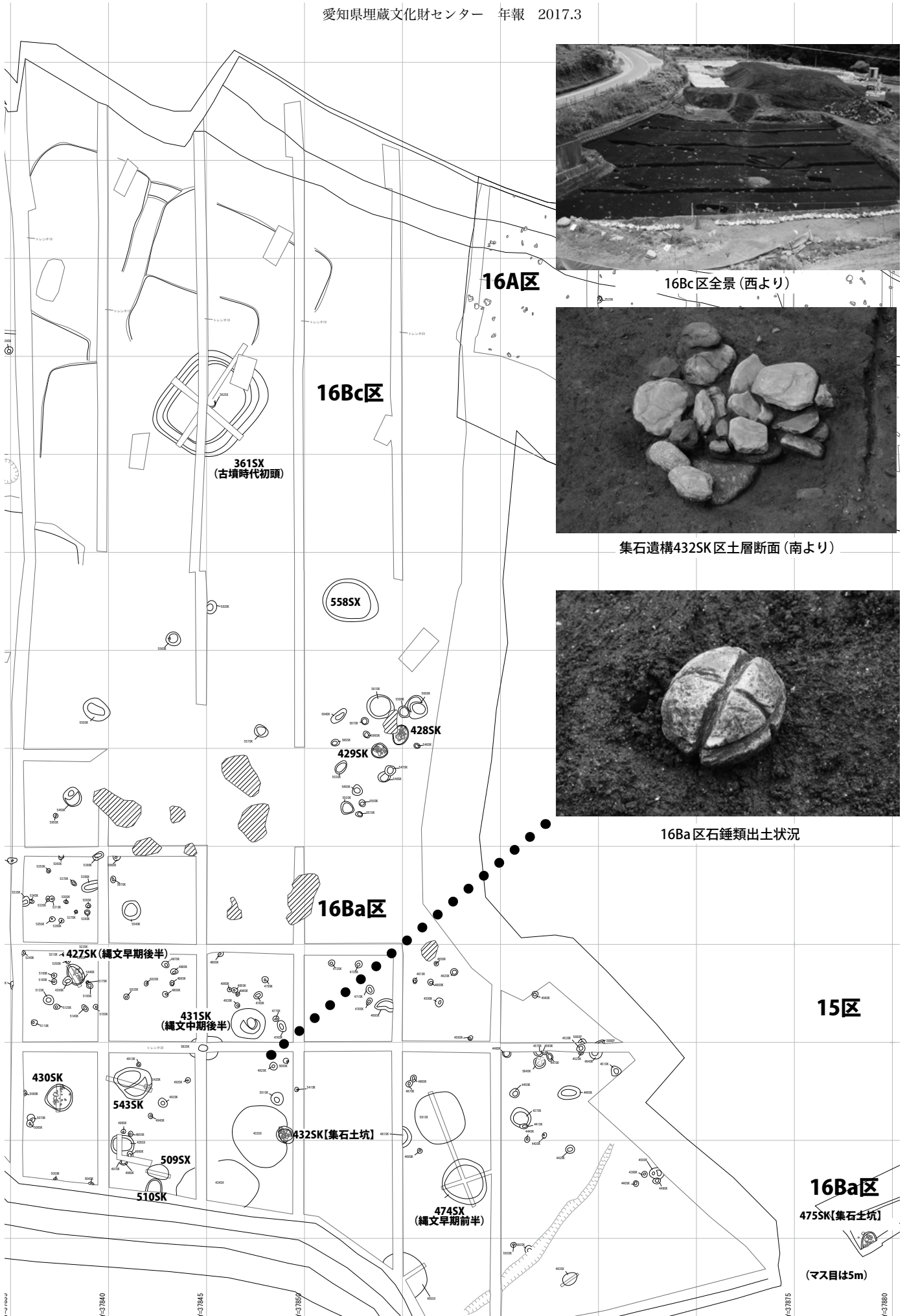
Y=37800

Y=37805

Y=37810

Y=37815

16B区遺構位置図 (1:250) 【マス目は5m】



16Bc区全景 (西より)



集石遺構432SK区土層断面 (南より)



16Ba区石錘類出土状況

おおなぐら

大名倉遺跡(範囲確認調査)

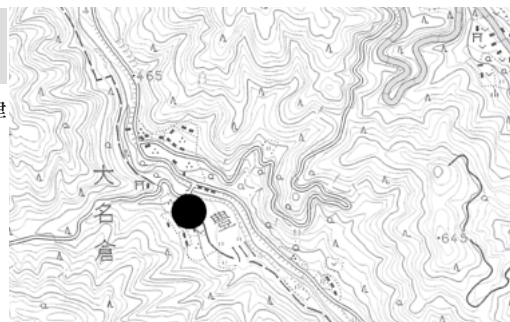
所在地 北設楽郡設楽町大名倉字滝ノ上、滝ノ下、下谷、南貝津
(北緯35度06分45秒 東経137度34分01秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年10月～11月

調査面積 156㎡

担当者 酒井俊彦・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年10～11月に行った。範囲確認調査は、平成19・20・25～27年度にも行われている。また昭和43年(1968)には、早稲田大学にガトレンチによる発掘調査を行ない、縄文時代後・晩期の土器が多く出土している。

立地と環境 大名倉遺跡は豊川(寒狭川)の右岸に位置する。山地の狭い溪谷を流れてきた豊川の両側が大きく開ける地点にあたる。本遺跡の立地する右岸は2～3段の河岸段丘が形成され、対する左岸には西地・東地遺跡が存在する。本遺跡の標高は428～468mである。

調査の概要 調査は1m×2mのトレンチを78か所を設定して調査を行った。調査対象地は大きく3つ別れており、遺跡北部の茶畑などの耕作地エリア、遺跡西部の斜面地にかかる山林・竹林エリア、遺跡南部の耕作地エリアである。

遺跡北部エリアは標高449～458mの緩斜面である。TT001～011では礫の多い堆積層で顕著な遺構・遺物はなかった。ところがTT012で手のひらほどの大きさで縄文時代早期の押型文土器が出土したのを皮切りに、そこから下位のトレンチ(TT015・017・020・023・025)で、礫の混じりが少なく厚い黒色シルトの堆積層が確認され、縄文土器や打製石斧が出土した。縄文時代中期以降の遺物包含層と考えられる。特にTT025は道路脇の耕作地内で削平と攪乱が著しかったものの、縄文時代中期後葉の土器片がまとまって出土した。状況からみて土器埋設遺構と推定され、おそらく当該期の竪穴建物の床面付近が残存していたものと思われる。興味深い点としては、道路を挟んだ北東側で行われた早稲田大学の調査地点とは土器の時期が大きく異なっていることである。現況では見えにくくなっているが、この辺りで段丘と斜面地に区分されると思われる。

遺跡西部エリアは、標高458～468mの宅地跡とその周辺の平場にトレンチを設定した。宅地跡に相当するTT030～036で、近世の陶器が出土している。ただし遺構には伴わないことから、近世後半以降に進められた開墾によって混入したものと考えられる。

遺跡南部エリアは、標高443～452mの緩斜面で草地となっている。しかしTT037～078では耕作土・表土が50cm前後ありその下で黄褐色土の基盤層がある。この状況から、ほぼ全体に耕作地化で削平を受けているとみられる。顕著な遺物の出土はなかった。

以上にみる今年度の調査成果に加えて昨年度までの調査成果を加味して検討すると、遺跡の中心は早稲田大学の調査地点である。ここは上位の段丘面北端に位置し、そこから北西方向へ上る緩斜面では縄文早期・中期などの遺構・遺物が、標高約453m付近まで分布している。一方遺跡南部は、TT039・043から北側に東西方向の谷地形がみられ、実質的にはこの谷地形が遺跡の南限になっている可能性が高いと考えられる。

(永井邦仁)



調査風景 (TT020～025付近、南西から)



TT025 (左隅に土器埋設遺構、北西から)



大倉倉遺跡の調査成果 (S=1/2,000)

くるみくぼ

胡桃窪遺跡(範囲確認調査)

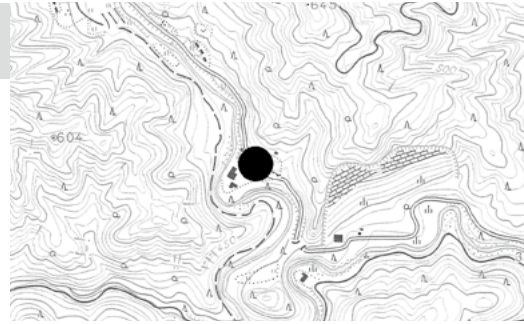
所在地 設楽町大字大名倉字胡桃窪、丸山地区内
(北緯35度6分13秒 東経137度33分9秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年8月～10月

調査面積 494㎡

担当者 酒井俊彦・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年8月から10月にかけて実施した。調査対象地の現況は段状に造成された水田と宅地跡である。標高は最も高いところで435m、低いところでは402mである。基本的に1m×2mのトレンチを設定して調査を行った。

立地と環境 胡桃窪遺跡は豊川の支流の一つである寒狭川の北岸丘陵部に位置する。遺跡は、寒狭川が北西から南東に流下する部分に、南西方向に向かって突出する丘陵の先端付近に位置し、段丘崖が発達する地形となっている。調査区中央南西側は製材所跡地の平坦な地形であったが、調査の結果、2～8mにおよぶ大規模な盛り土によって造成されたことが判明した。調査区北東側は尾根状の地形となり、北方の光石山候補地へと続いている。

調査の概要 調査区は112カ所、494㎡を設定した。製材所跡地の平坦面では、下位の遺物包含層を確認するためにトレンチを大きくして掘削を行った。

調査範囲は、南西向きの尾根状地形で、現況では大きく3つの段丘を数えることができる。下位と中位の段丘の間には製材所跡地の平坦面が存在するが、これは造成によるもので、ここにはさらに複数の段丘が存在していた可能性がある。

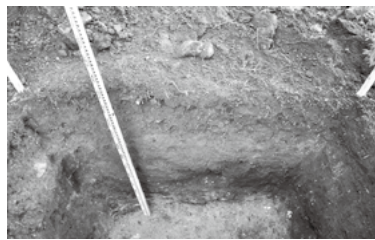
下位の段丘は標高403m前後にあり、これより下は現寒狭川の高水敷となる。この最下位の段丘崖裾にはTT117～TT120、TT123、TT124、TT142を設定した。これらのトレンチでは遺構や包含層は認められず、地表面の耕作土以下はすべて河川堆積の礫であった。

中位の段丘は417～424m付近に存在する。この段丘上では基盤層の直上に黒色土の堆積が見られ、灰釉陶器や縄文土器(押型文)の破片を検出した。この中位の段丘北西側は地表面に近い標高で岩盤や風化岩が検出され、調査範囲の北側尾根上には巨岩の露出も見られる。調査範囲の南東側ほど下層での岩盤等の検出は無くなり、耕作土や造成土が厚くなる状況である。この中位の段丘上ではTT11やTT92付近で湧水が激しく、湧水の流下する方向には黒色土などの堆積も無いことから、この周辺には湧水によって削られた小規模な谷状地形があったものと考えられる。

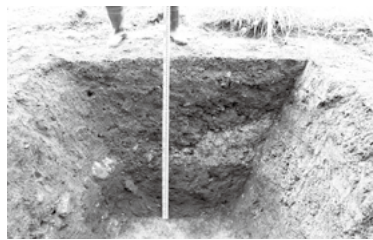
高位の段丘は428～434m付近に位置する。この段丘中の西側に設定したTT25では表土からではあるが灰釉陶器破片が検出された。TT24、TT25、TT30、TT36では黒色土の堆積が見られ、中位の段丘状で検出された黒色土と連続するものと見られる。

調査の結果、遺物は、TT32で押型文土器を検出(写真の最下層)、TT25、TT40、TT41、TT76、TT100、TT133、TT137で灰釉陶器の破片を検出した。この内、TT137からの出土は旧水田耕作土からの出土であり、再堆積土への混入の可能性が考えられる。

(鈴木恵介)



TT25(上層で灰釉陶器出土)



TT32(最下層より押型文土器出土)



TT40(最下層より灰釉陶器出土)



TT76(礫層の上で灰釉陶器出土)



TT100(最下層に落ち込みを確認)



製材所跡地(造成により形成)

おおぞらまえ

大空前遺跡(範囲確認調査)

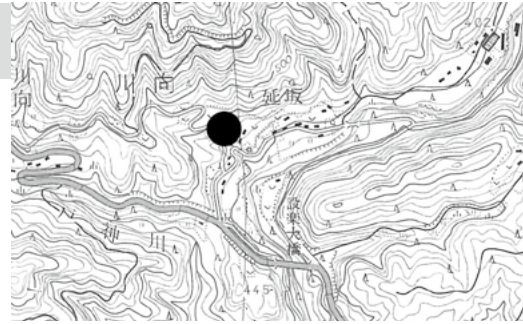
所在地 北設楽郡設楽町川向大空前・新直
(北緯35度6分49秒 東経137度33分54秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年6月

調査面積 60㎡

担当者 酒井俊彦・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「田口」)

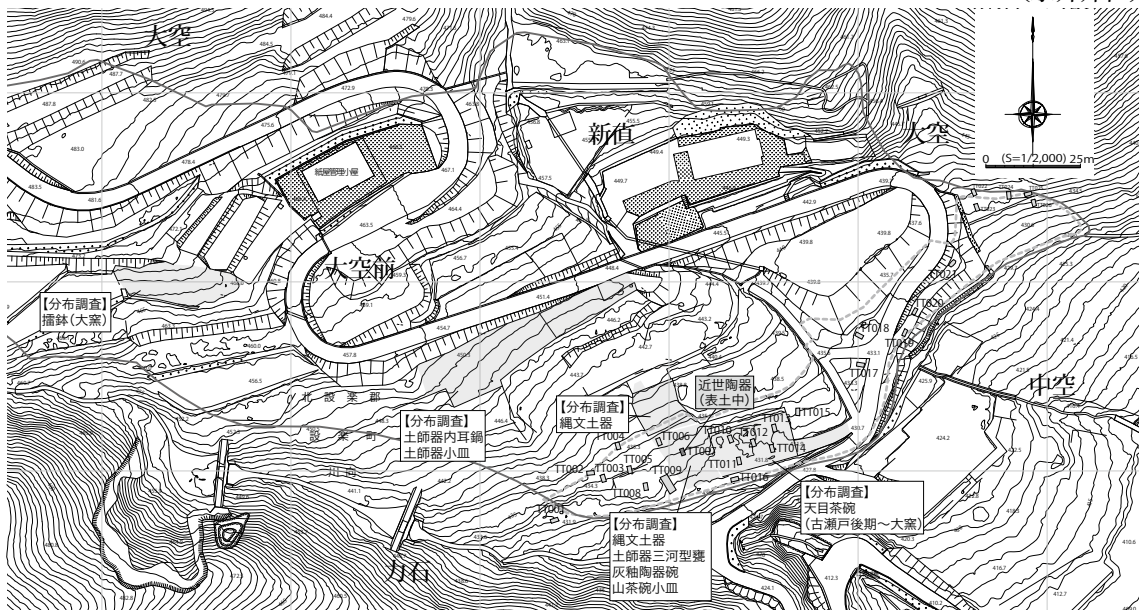
調査の経過 調査は、国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年6月に行った。遺跡の現況は耕作地・宅地跡・山林である。トレンチは、1m×2mを25か所、2m×5mを1か所を設定した。

立地と環境 大空前遺跡は、川向地区の境川右岸に位置する。遺跡の標高は430～488mで、全体に斜面地で一部に小平場がみられる。本遺跡の南側には上ヲロウ・下ヲロウ遺跡が隣接している。また南西側の万瀬遺跡との間は、幅約15mの谷地形が存在する。

調査の概要 今年度の調査対象地は、ダム湛水域となる標高約440mより低位部分である。TT001～009は山林から草地へ転換する斜面地で、顕著な遺構はなかった。TT007からは近世陶器1点が出土している。TT010～016は宅地造成された平場で盛土下に旧表土が残存していたものの、遺物の出土はなかった。TT017～021は町道脇の造成地で、旧表土の残存もなかった。TT022～026は山林内で、TT023で近世以降の陶器が出土しているが顕著な遺構は検出されなかった。

本遺跡では、遺跡分布調査時に地表面で平安時代の土器が採集されているが、今回の調査では出土していない。この点は遺跡地が全体に斜面地で土石流堆積が各所にみられることとも関連していると考えられる。したがって、より上位の地点から流されてきた可能性も想定しておく必要がある。

(永井邦仁)



大空前遺跡の調査成果 (S=1/2,000)

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡(範囲確認調査)

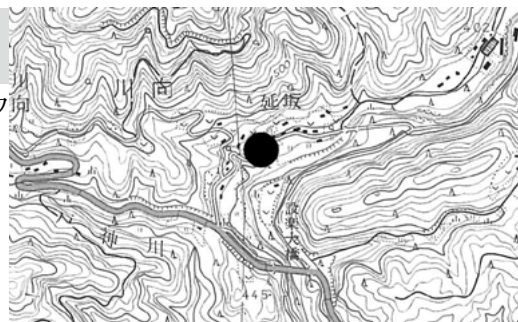
所在地 北設楽郡設楽町川向中空、上ヲロウ、下ヲロウ向
(北緯35度6分50秒 東経137度34分1秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年6月～10月

調査面積 750㎡

担当者 酒井俊彦・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年6月～10月に行った。遺跡の現況は、耕作地と宅地跡である。調査は、1m×2mのトレンチを220か所設定し、9か所では最大3m×20mのトレンチを設定した。重機掘削後、遺構検出と土層断面観察を実施した。

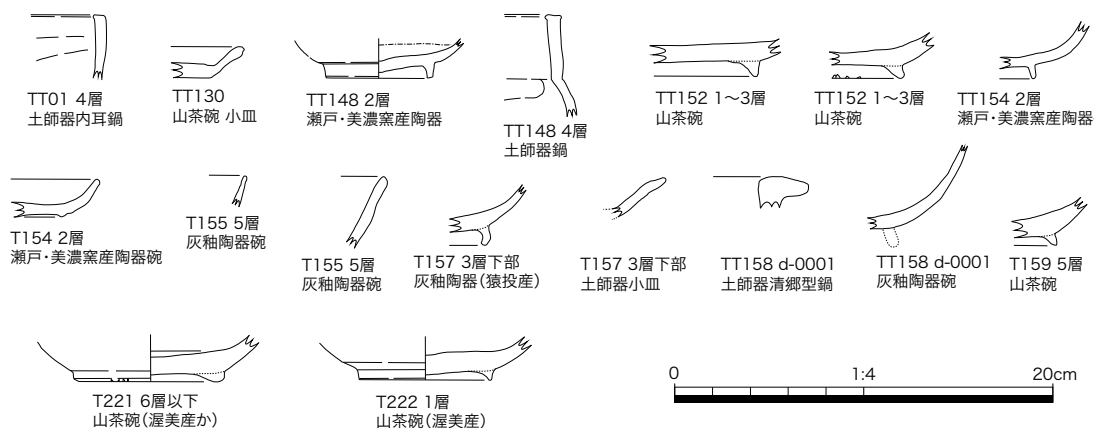
立地と環境 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡は、境川右岸の段丘面から山地へ上る緩斜面に立地する。遺跡の標高は385～425mである。遺跡の中央には、大空前遺跡から流下する沢(中空沢)があり、その付近は土石流地帯である。「大空」や「中空」は斜面地に多い「ソレ」地名である。

調査の概要 調査の結果、字中空に相当する土石流地帯での顕著な遺構・遺物の検出はなかった。ただし同じ緩斜面でも東部の字上ヲロウでは、TT125～TT163で灰釉陶器～戦国時代の陶器が出土し、中世を中心とする遺構・遺物の展開が想定される。特に遺跡東端の沢付近では土石流堆積の下に黒色シルトの包含層が残存しており、注意を要する。

次に、道路から下位の字下ヲロウでは道路付近で山茶碗や土師器が出土し(TT167・169・220)、さらに川近くの水田まで下ると、縄文土器や石器の出土が認められる。特にTT231では黄褐色シルトの基盤層を検出面として縄文時代中期後葉の竪穴建物跡などが検出されている。当該トレンチ付近では新しい時期の小さな沢が入り込んでいるが、遺構の残存状況が良好と考えられる。

一方、TT231から西方のTT174・175・184・185などでは、縄文時代晩期の土器や石器も出土し、中空沢近くのTT198では有茎石鏃も出土している。加えて沢の西側でも土師器が出土しており(TT213・219)、沢が比較的最近のものであることを示している。したがってここでも土石流堆積の下に縄文時代～古代の遺物包含層の展開を想定しておく必要がある。

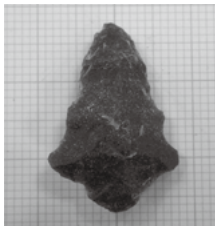
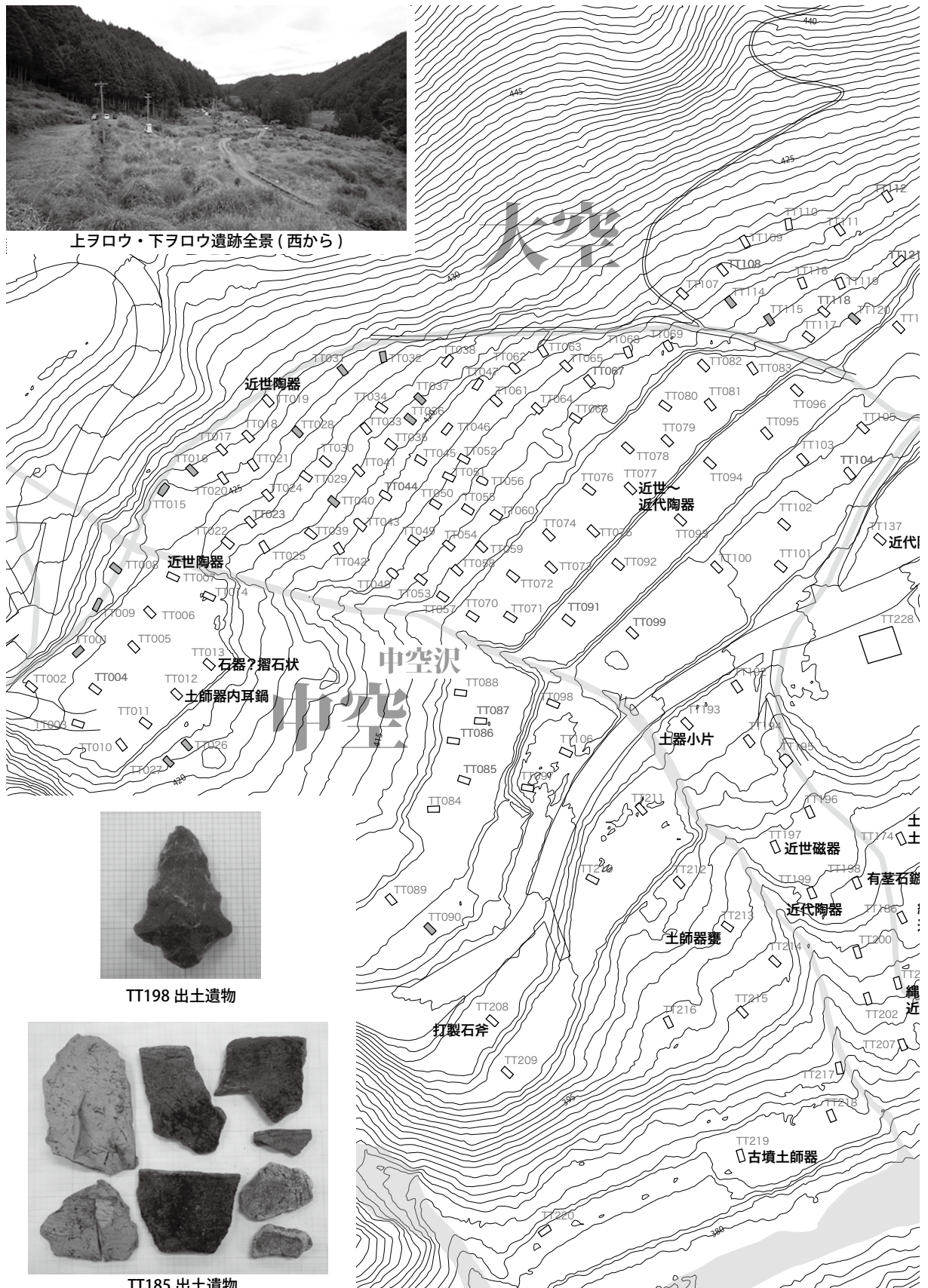
(永井邦仁)



上ヲロウ・下ヲロウ遺跡範囲確認調査の出土遺物実測図(S=1/4)



上ヲロウ・下ヲロウ遺跡全景（西から）

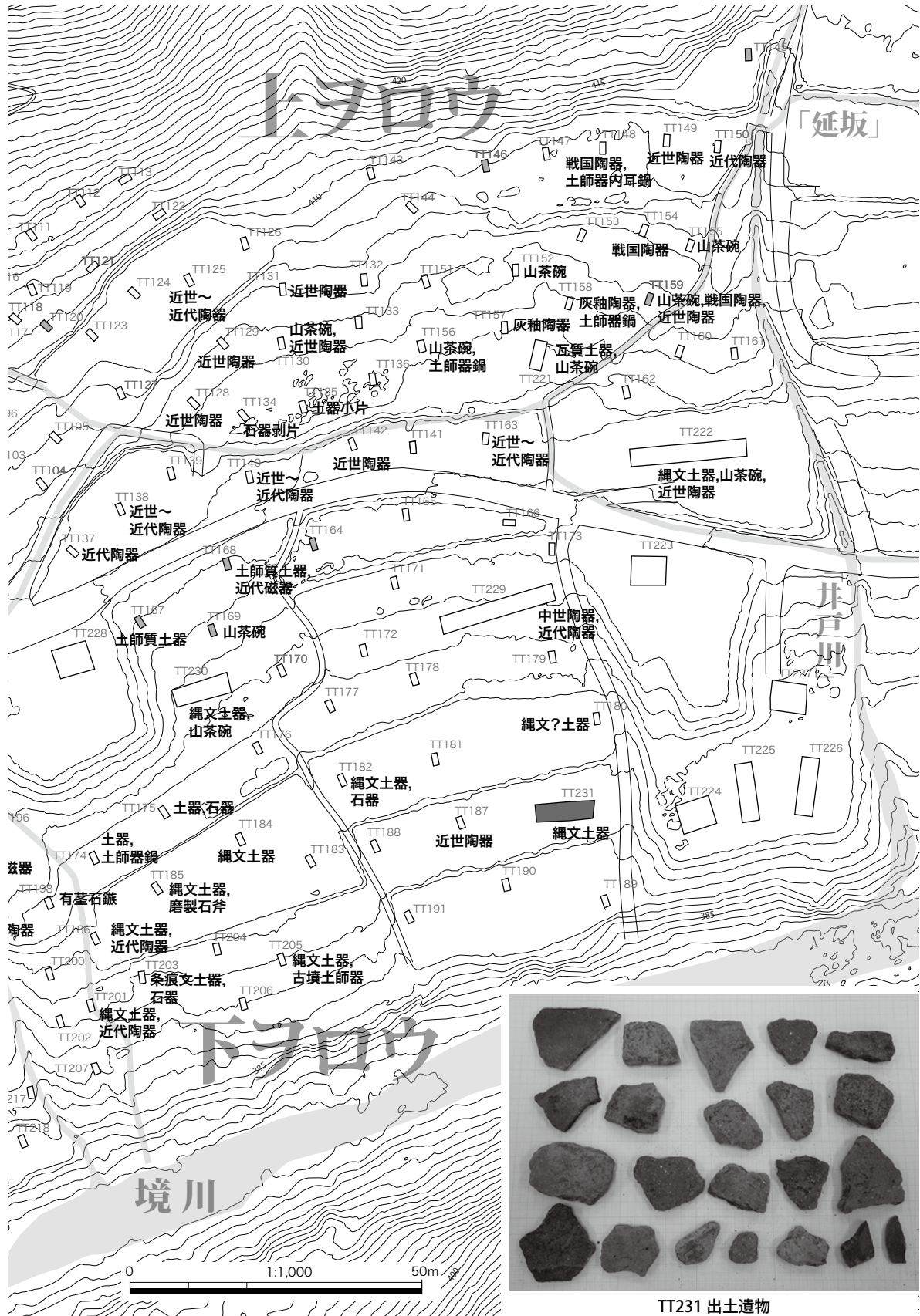


TT198 出土遺物



TT185 出土遺物

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査成果（西半部、S=1/1,000）



TT231 出土遺物

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査成果 (東半部、S=1/1,000)

かわむきちかざわ

川向近沢遺跡(範囲確認調査)

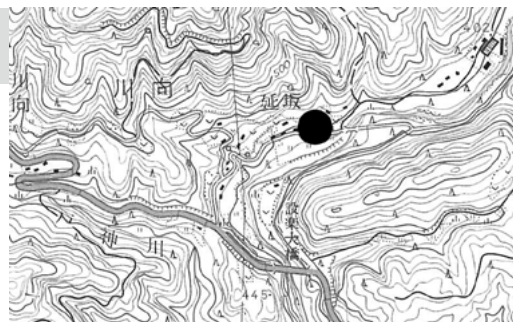
所在地 設楽町大字川向字近沢、馬道地内
(北緯35度6分51秒 東経137度34分7秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年8月～10月

調査面積 500㎡

担当者 酒井俊彦・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年8月から10月にかけて実施した。

立地と環境 川向近沢遺跡は、豊川の支流の一つである境川の北岸丘陵部に位置する。境川が北東から南西に流下する部分に面し、南に向いた丘陵の裾から中腹付近が調査対象地である。西は境橋沢を挟んで上ヲロウ・下ヲロウ遺跡と接し、東は境川に削られた崖となっている。調査対象地の現況は、段状に造成された耕作地跡と宅地跡で、標高は最も高い所で424m、低い所では388mである。

調査の概要 調査は1m×2mのトレンチを基本とし、83か所を設定して調査を行った。その結果、調査範囲全域にわたって大規模に旧地形が改変されていることが判明した。旧地形は、南北方向では南側の境川にむかって下る地形で現況に大きな違いは無いが、東西方向では東側が高く、西の境橋沢に向かって下る地形となっている。

調査区東端部のTT30、TT29、TT40、TT51が南北に連なる部分は尾根状となっており、耕作土のすぐ下に風化岩や基盤層が検出される。これより西は基盤層の標高が急激に下がり、TT25とTT48、TT58を結ぶ付近は旧表土と考えられる黒色土の堆積も厚くなっている。さらに西は境橋沢による土石流が下層に堆積し、上層は沢の整備と宅地造成により厚く埋め立てられている。宅地跡のTT12ではトレンチ内の全域が埋立土により造成されており、トレンチ東半部の一部では旧表土と考えられる黒色土を確認したが、トレンチ西半部ではこの層の標高が下がっているために確認できていない。

調査範囲最上部のTT1からTT8にかけての山林内は、黒色土等の包含層の可能性のある層は見られず、腐植土等による表土の下は土石流による基盤層であった。

調査範囲最下位のTT66以降のトレンチを設けた県道小松田口線より南側では、基盤層の多くは河川堆積による砂礫であり、遺物包含層と考えられる層は検出できなかった。隣接する上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査ではこれらのトレンチと同標高付近で縄文土器を包含した層も検出されているが、当調査範囲では層序の検討から水田としての造成時に削平されて残存していないと考えられる。

遺物はTT12では土師器と染付、播鉢(近世以降)、TT25では土師質の土器破片、TT34では石棒か石刀の可能性のある石製品、TT36では土器破片(縄文)と安山岩の剥片、TT39では土師器破片と播鉢(近世以降)、TT47では中世陶器の片口鉢(鎌倉～室町)、TT48では安山岩系石材の剥片、TT50では土師質鍋と石材剥片がみられた。いずれも表面に近い層や再堆積層からの出土であり、造成以前の旧表土より下位からの出土は見られない。

(鈴木恵介)



川向近沢遺跡 調査範囲 (S=1/2,000)



川向近沢遺跡 遠景



TT34 石製品 (緑色片岩製)



TT47 出土陶器 (片口鉢)



TT74 (表土直下に河川堆積)

いしはら

石原遺跡(範囲確認調査)

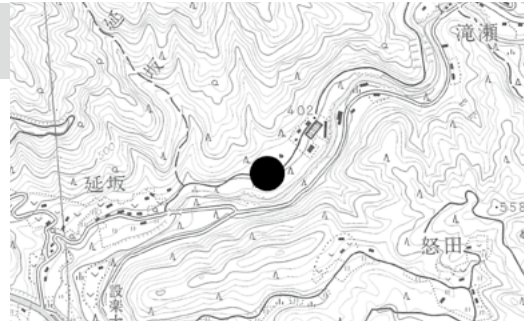
所在地 北設楽郡設楽町川向字ヒチコ、石原
(北緯35度6分55秒 東経137度34分22秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年8月～10月

調査面積 730㎡

担当者 酒井俊彦・蔭山誠一



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の事前調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。石原遺跡は縄文時代の遺物散布地として周知の遺跡である。今回の範囲確認調査は、遺跡の北側にある調査対象範囲内に平面1m×2mの試掘トレンチなどの計121ヶ所を設定した。そして遺構と遺物の有無を地表面から順にバックホウや人力により掘り下げて確認し、遺構面(地山面)の遺構・遺物と地層の堆積状況を確認した。調査面積は730㎡である。

立地と環境 石原遺跡は、境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地する。なお、かつては稲武方面から田口方面にいたる街道と田口方面から津具方面にむかう伊那街道に結ぶ間道が遺跡を通る。

調査の概要 調査は遺跡の中央を東西に走る林道の北側にあるTT001～TT013から始めた。山際にあるこの地点も耕作地や植林などに伴う造成がなされているが、TT001～TT012では地表面から0.1m～1.5m前後の深さで遺構面や地山面が確認でき、TT006・TT012では縄文土器・土師器などが出土し、土坑などの遺構も検出できた。TT009では人頭大の礫を多く含んだ礫層が深く及んで、遺構面を削平したものと考えられたが、TT118・TT119・TT024では同一と思われる礫層の下より土坑や土器片が出土し、この土石流と考えられる礫層が縄文時代以後のものであることを確認した。またTT013はTT012の山側の遺跡の範囲を確定するために設置したトレンチで、表土下の0.2m程で地山面が確認できたが、遺構・遺物を確認することができなかった。その南東側であるTT015～TT020・TT025・TT039では出土遺物は確認できなかったが、TT019・TT020・TT025において土坑などの遺構を検出した。遺跡北西部にあるTT021～TT038・TT040・TT120・TT121では、宅地や耕作地になっていることもあって整地・盛土層が1m以上に及ぶ地点が多く、明確な遺構や出土遺物をあまり確認できなかった。その中で遺跡中央部にあるTT029・TT030において土坑を検出し、土器片が出土した。TT031・TT040・TT120・TT121では、土石流と思われる礫を伴う地層がみられた。

林道の南側で遺跡の北西側にあるTT041～TT046・TT097～TT111・TT115～TT117では、TT041～TT045において、地表面下0.5m前後にて土坑などの遺構を検出した。TT046・TT115～TT117は、盛土が厚くTT117の一部を除いて遺構面を確認できなかった。TT097～TT107では、土坑などの遺構は確認できる地点が多くあったが出土遺物はなく、遺跡の東端部にあたるTT106・TT110・TT111において縄文土器片が出土し、土坑などの遺構も検出できた。遺跡の中央部から南西側にあるTT047～TT096・TT113・TT114では、TT047～TT050・TT064～TT096において、多くのトレンチにて土坑などの遺構が検出でき、出土量は多くないもののTT049・TT072・TT077～TT079・TT090・TT094・TT095にて縄

文土器片や安山岩刃器が出土した。一方、TT056～TT063では明確な遺構面が確認できず、上流のTT031・TT040・TT120・TT121の地点から続く谷状地形が続くものと考えられた。最も標高が低い地点にあるTT087・TT091・TT092では、明確な遺構・出土遺物を確認できなかった。遺跡の西端部にあるTT051・TT052・TT112～TT114では、TT051・TT052において、土坑や縄文土器片が確認され、遺跡の西端がこの地点まで及ぶことが確認できた。またTT112ではTT051にともなう遺跡範囲を探索したが、明確な遺構や出土遺物を確認できなかった。TT113・TT114では盛土が厚く、トレンチの一部で遺構や地山面を確認できるのみであった。

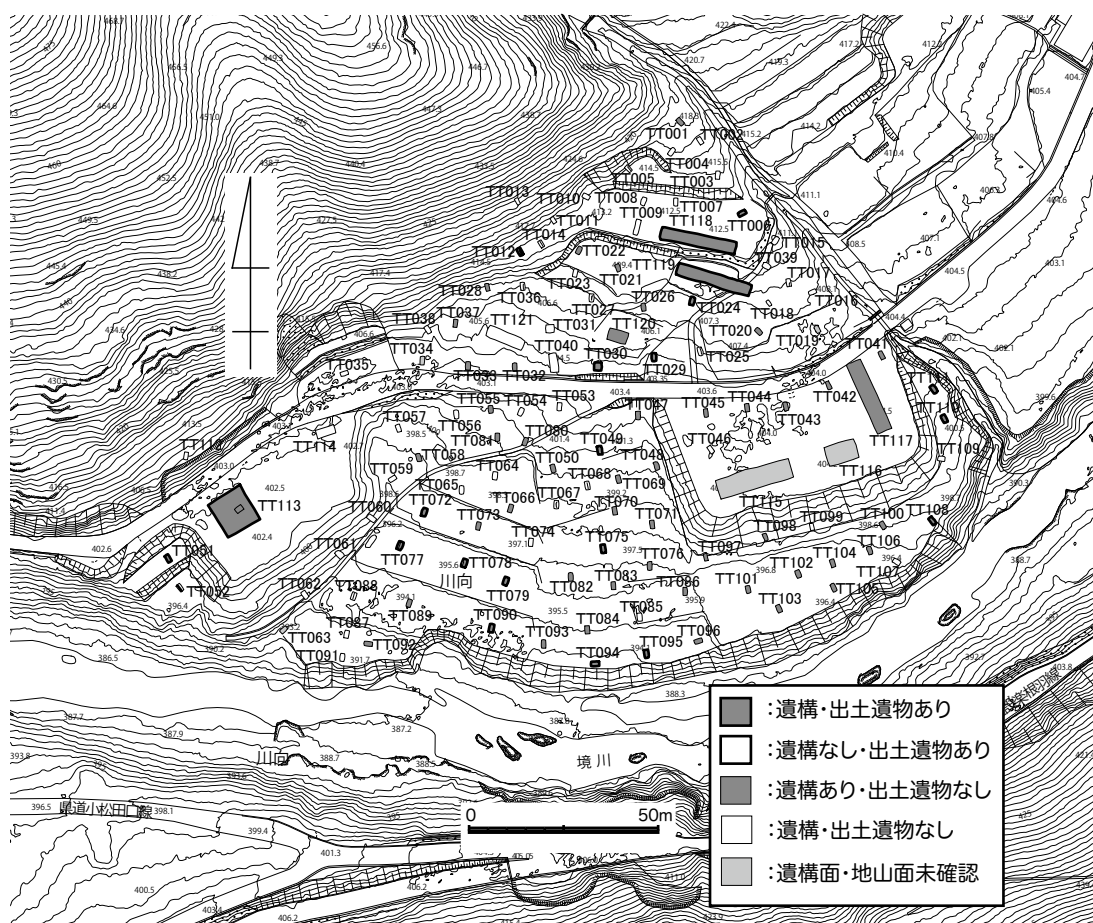
(蔭山誠一)



TT052遺構検出状況(東から)



TT119遺構検出状況(南西から)



しものべさか

下延坂遺跡(範囲確認調査)

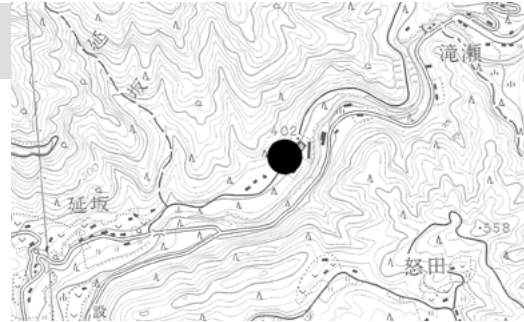
所在地 北設楽郡設楽町川向字下延坂、上延坂
(北緯35度6分58秒 東経137度34分28秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年6月～8月

調査面積 828㎡

担当者 酒井俊彦・蔭山誠一



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の事前調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。下延坂遺跡は縄文時代と弥生時代、平安時代末～鎌倉時代の遺物散布地として周知の遺跡である。今回の範囲確認調査は、遺跡の北側にある調査対象範囲内に平面1m×2mの試掘トレンチを59ヶ所、2m×2mの試掘トレンチを1ヶ所、2m×3mの試掘トレンチを3ヶ所、2m×5mの試掘トレンチを2ヶ所、3m×3mの試掘トレンチを1ヶ所、3m×5mの試掘トレンチを6ヶ所、3m×8mの試掘トレンチを9ヶ所、4m×8mの試掘トレンチを1ヶ所、3m×15mの試掘トレンチを6ヶ所、3m×17mの試掘トレンチを1ヶ所の計89ヶ所を設定した。そして遺構と遺物の有無を地表面から順にバックホウや人力により掘り下げて確認し、遺構面(地山面)の遺構・遺物と地層の堆積状況を確認した。調査面積は828㎡である。

立地と環境 下延坂遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地する。なお、かつては稲武方面から田口方面にいたる街道と田口方面から津具方面にむかう伊那街道に結ぶ間道が遺跡を通る。

調査の概要 調査は、遺跡の中央を北東から南西に走る林道の東側にあるTT001～TT019・TT021・TT022から始めた。遺跡のこの部分は近年まで建物が存在し、地表面の造成があったが、TT001～TT005・TT007～TT009・TT011～TT015・TT021・TT022において、地表面から0.1m～0.5m前後の深さで、遺構面や地山面が確認でき、TT002～TT005・TT009・TT011・TT012・TT015では縄文土器・古代の土師器の甕・灰釉陶器の碗・山皿・安山岩と凝灰岩剥片などが出土し、土坑などの遺構も多く検出できた。TT006・TT010・TT016～TT019では、地表面下に整地・盛土層が厚くあり、TT010で山皿、TT019で安山岩剥片を確認したが、その他のトレンチでは出土遺物もなく、遺構面・地山面を確認できなかった。

林道の西側で、遺跡の北側にあるTT020・TT023～TT039では、山側のTT020・TT023～TT025・TT028～TT030・TT036～TT039では整地・盛土層が深い地点が多いが、TT026・TT027・TT038・TT039では、土器片とともに土坑が少数認められ、遺跡の北西端部にあたるものと思われる。またTT034・TT035では宅地による造成により遺構面が残っておらず、山斜面にあるTT031～TT033では、中世以前の遺構・遺物を確認できなかった。

林道の西側で遺跡の北側にあるTT040～TT067・TT069～TT072では、地表面下に宅地や耕作地の造成に伴う整地・盛土層が深い地点が多いが、遺構面・地山面において土坑や溝などの遺構が確認できるトレンチが多く、TT040・TT048では弥生時代中期の土器片が多数見つかり、付近に弥生時代中期の遺跡がひろがる可能性が高い。またTT042・TT047・TT048・TT049・TT051・TT054・TT069・TT070などでは、縄文土器などの土器片が出土し、TT051より南東側の扇状地形のひろがる地点では、遺跡が展開する可能性がある。一方、

TT052～TT062のある遺跡の西隅部では、明確な遺構が確認できなかった。

林道の南東側にあるTT068・TT073～TT089では、表土を掘削すると、遺構面や地山面が確認でき、多くのトレンチで土坑などの遺構が検出できた。その中で、TT068・TT073・TT077・TT078・TT080・TT083・TT085・TT086・TT088・TT089では、縄文土器・灰釉陶器・安山岩剥片・凝灰岩剥片・黒曜石剥片などが出土した。出土遺物から縄文時代後期頃の遺跡が展開する可能性がある。

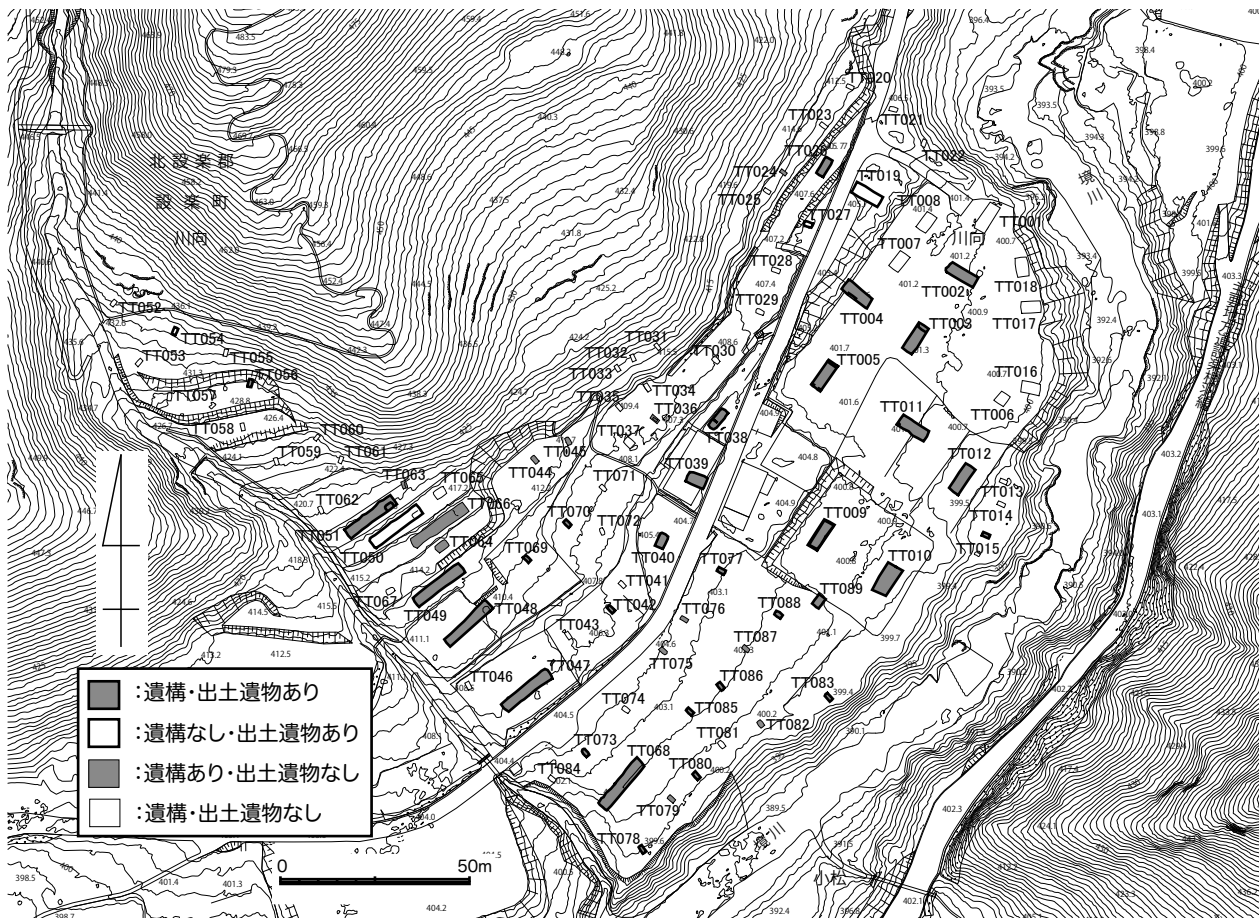
(陰山誠一)



TT040遺構検出状況(東から)



TT068遺構検出状況(北東から)



マサノ^{さわ}沢遺跡

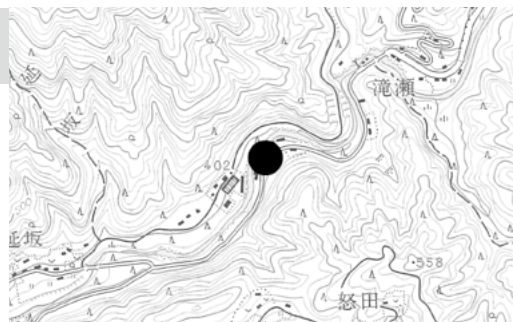
所在地 設楽町大字川向字マサノサワ
(北緯35度7分4秒 東経137度34分35秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年5月～7月

調査面積 364㎡

担当者 酒井俊彦・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年5月から7月にかけて実施した。調査対象地の現況は段状に造成された水田跡と山林である。

立地と環境 遺跡は、小松地区の境川左岸(東岸)に位置する。境川はこれより上流では西にむかい、調査地周辺で南に大きく流れを変えている。調査地は北西に向いた斜面および北西方向に突き出た河岸段丘上に位置している。現地形は県道10号線の西側が河岸段丘に造成された水田跡、東側が丘陵裾部の山林となっており、西側の水田跡は大きく分けて4段に造成されていた。県道東側では道路に近い部分は茶畑として利用されている。

調査の概要 県道10号線より西側の河岸段丘上では、低位の建物等跡(標高400m以下)では削平を受けたためか、TT133からTT135付近では、現地表の0.3～0.5mほど下で河川堆積の基盤層に到達する。TT61からTT82にいたる建物跡地の縁辺部では基盤層はTT133等よりも標高は下るが、より厚く埋め立てられている様子が伺える。これらのトレンチでは表土から遺物は採取できるものの、中位の段丘と同様の包含層の存在は認められず、TT70にいたっては表土下1.8mに至っても現代のゴミを含む土によって盛土を行った様子が見られる。後述の1948年頃からの開墾を始めとして、この付近では造成が繰り返し行われていたことが推定される。

同じ河岸段丘中の中位(標高400～402m)から高位(標高405m付近)では石囲炉をはじめとする遺構、原位置を保っていると思われる包含層(遺構埋土の可能性あり)が層位中で確認できた。例としてTT16やTT38の写真を掲載しているが遺物出土量も多い。ここで確認された包含層の標高は400m～405m付近に位置しており、東側では現況の県道10号線の下に連続している可能性が高い。この包含層よりも上層は耕作土や床土として攪乱されている場合が多く見られ、この上層部分で断面中に遺構が確認されたことは無かったが多くの遺物が検出される。

県道東側については、道路際が茶畑として利用されていた。TT83～TT95を配置した茶畑跡については、表土にわずかな遺物を検出するにとどまり、表土直下が基盤層であることが多い。基盤層も土石流によるため、県道西側の基盤層である河川堆積や粘性の強い基盤層とは異なる。茶畑部分よりさらに東側は植林された山林でTT96～TT132までを配置したが、こちらの層位も基盤層は土石流によるものが多く、表土である腐植土がその上に堆積している状況である。遺物は表土よりわずかに検出されている。

調査範囲内で確認された遺構は、前述の石囲炉がTT35で検出され、炉周辺の検出面で縄文時代後期の土器が複数検出されたことから竪穴建物に伴う石囲炉と考えられる。他にはTT34では土坑、TT23、TT36、TT39、TT41ではトレンチ内底面すべてが遺構内に位置し

ていると考えられる。これらはすべて検出状態のまま埋め戻している。遺構や遺物が多く検出された範囲については図に示した。

確認された遺物は、出土土器については縄文時代後期～晩期が主体となっており、中には中期初頭まで遡るものがみられる。古代の遺物は灰釉陶器がTT74で出土している。範囲確認調査の性格上、明らかな遺構については完掘していないため、これより古い時期の遺構や遺物が下層において発見される可能性は残っている。

石器は、白色風化石材と呼ばれる安山岩系石材が最も多く、次いで破断面が橙色をしめす安山岩も多数見られる。下呂石、黒曜石も数点確認された。確認された石器は剥片や破断した礫状態のものが多いが、TT16 (写真) の下層では磨製石斧が集中するなど特徴的な出土状況を示すものもある。

県道10号線の東側の状況については、愛知県教育委員会 2007『設楽ダム関連遺跡総合事前調査 詳細遺跡分布調査報告書』でも県道の東側を拡張する際の試掘調査で「耕作土の直下が地山となっており、明確な遺構・遺物包含層は認められなかった」とあり、TT83以降、TT132までの調査結果はこれと同様である。また、「昭和23年から昭和24年開墾の際に(以下略)」とあり、開墾によって地形が改変されていることが示唆されている。1948年撮影の国土地理院所蔵空撮写真「USA-M1097-A-26」でもマサノ沢遺跡南東側の尾根頂部より北西側はすべて木が伐採された状態が見え、この時期に削平を受けた可能性が考えられる。

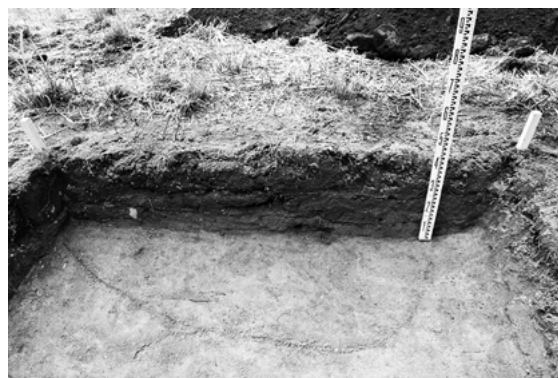
(鈴木恵介)



マサノ沢遺跡調査範囲 (S=1/2000)



TT135 表土下には河川堆積



TT15 遺構検出状況



TT16 断面状況



TT16 最下層出土石器・石材



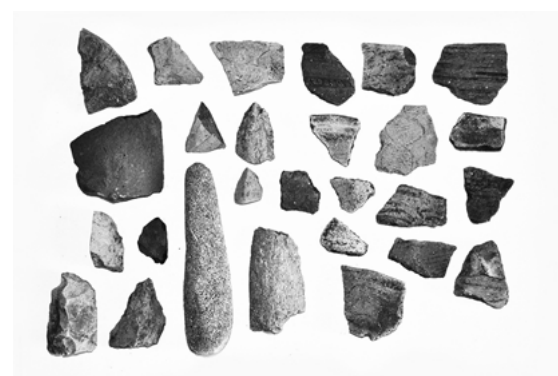
TT35 石囲炉検出状況



TT35 出土遺物



TT38 断面状況



TT38 出土遺物 中央下が石棒破片

ね みちそと

根道外遺跡(範囲確認調査)

所在地 北設楽郡設楽町八橋字根道外
(北緯35度7分15秒 東経137度34分43秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年11月

調査面積 172㎡

担当者 酒井俊彦・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年11月に行った。調査対象地の現況は、耕作地として開墾された山林で、山側にシシ垣が廻っている。遺跡の標高は422～432mである。

立地と環境 遺跡は、八橋地区の境川支流であるタコウズ川左岸に位置する。長さ約80m幅約40mの狭小な河岸段丘があり、南北端と東側が山地斜面によって囲まれている。段丘面の南端には、山地斜面から続く埋没谷地形がタコウズ川に向かって抜けており、その部分や窪地となっている。基本的な地層は黒褐色シルトの耕作土の下に褐色系粘質シルトの基盤層となるが、後述するように、削平を免れた遺物包含層も一部で確認されている。

調査の概要 調査は、TT001～085・087(086は欠番)の1m×2mのトレンチが86か所設定された。

TT024では、縄文時代中期末の土器と石器が竪穴建物跡と思われる遺構の埋土から出土している。また TT087で土坑状の遺構が検出され、その検出面などから縄文土器が出土している。これ以外に、TT010・13・18・58・60・62・63で、縄文土器が出土する包含層、もしくはそれに類する土層が確認されている。なお、縄文時代以外のものとしてはTT047などで不整形な遺構が検出され、TT040からは近世後半の陶器が出土している。また、概ねTT010からTT074をつなぐ直線から山側はもと斜面地だったところを平場化したもので、出土遺物は近世後半以降の陶器小片がTT049で出土している。一方タコウズ川近くのTT016からTT051では河川堆積による砂礫層が検出されている。

以上の調査結果から、TT024とその付近、TT060とその付近で縄文時代中期と考えられる遺構と遺物の分布が想定される。なお、両者の間には遺構・遺物の空白がみられるが、ここはタコウズ川へ張り出した小尾根に相当し、耕作地化によって削平を受けているものと思われる。聞き取りによれば、本遺跡における開墾は第二次世界大戦後のことで、シシ垣が築造されたのもその頃と考えられる。

(永井邦仁)



TT024 遺構検出状況(南西から)



シシ垣と TT010(東から)

たき せ

滝瀬遺跡(範囲確認調査)

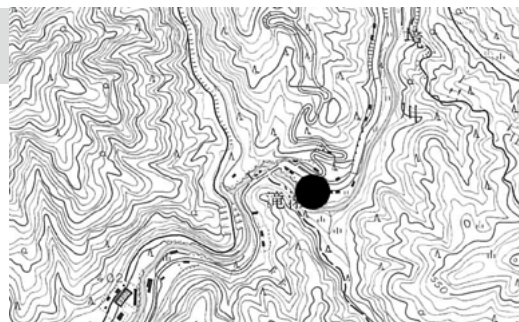
所在地 北設楽郡設楽町八橋字タキセ
(北緯35度7分10秒 東経137度34分55秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年11月～12月

調査面積 322㎡

担当者 池本正明・蔭山誠一



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の事前調査として国土交通省から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。滝瀬遺跡は縄文時代と室町(戦国)時代の遺物散布地として周知の遺跡で、平成27年度と今年度に本調査が実施されている。今回の範囲確認調査は、遺跡の北側にある調査対象範囲内に平面1m×2mの試掘トレンチを116ヶ所、5m×18mの試掘トレンチを1ヶ所設定した。そして遺構と遺物の有無を地表面から順にバックホウや人力により掘り下げて確認し、遺構面(地山面)の遺構・遺物と地層の堆積状況を確認した。調査面積は117ヶ所で322㎡である。

立地と環境 滝瀬遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地する。なお、遺跡の中を江戸時代の伊那街道が通る。

調査の概要 調査は遺跡の中央を東西に走る県道10号設楽根羽線の北東側にあるTT001～TT034から始めた。山側のトレンチでは表土を除去すると、その下から地山となる粘土や砂礫層、岩盤などが検出される地点が多く、明確な遺構や遺物は確認できなかった。一方、県道に沿ったトレンチでは地表面の下に表土や盛土・整地層があり、その下から地山の黄褐色～褐色粘土や粘土質シルト層の上面や黒褐色～黒色粘土～シルト層上面に遺構面が確認できた。TT016・TT018・TT021・TT028・TT029では、土坑の遺構とともに縄文土器片、安山岩剥片、凝灰岩剥片、天目茶碗片などが少数出土した。

県道の北で遺跡の北西側にあるTT035～TT041・TT049～TT116では、現状の地形を形成した際の地形造成により、TT052・TT085・TT090・TT104・TT109・TT114では遺構面が残っておらず、遺構・遺物が確認できなかったが、他のトレンチでは地表面下に黒色～黒褐色・暗褐色のシルト層が確認できた。その中で、県道沿いのTT036～TT038・TT041・TT072・TT074・TT097・TT111・TT116においては土坑などの遺構とともに縄文土器や安山岩刃器、安山岩剥片、山茶碗、天目茶碗などが少数見つかると、その周囲のトレンチにおいても遺構が確認できた。TT055・TT056・TT058～TT060では、土石流による大小の礫が伴う黒色シルト層が確認された。また遺跡の山側斜面地にあるトレンチでは、TT087において天目茶碗片が1点出土したが、他に明確な遺構や出土遺物は確認できなかった。

県道の南で遺跡の西端にあるTT042～TT048では、TT042において安山岩剥片が出土し、遺構と考えられる土坑を地層断面において確認できたが、その他のトレンチでは、現状の地表面造成に伴う盛土・整地層が深く及び、遺構・出土遺物は確認できなかった。TT042は遺跡の西端部に当たるものと考えられる。

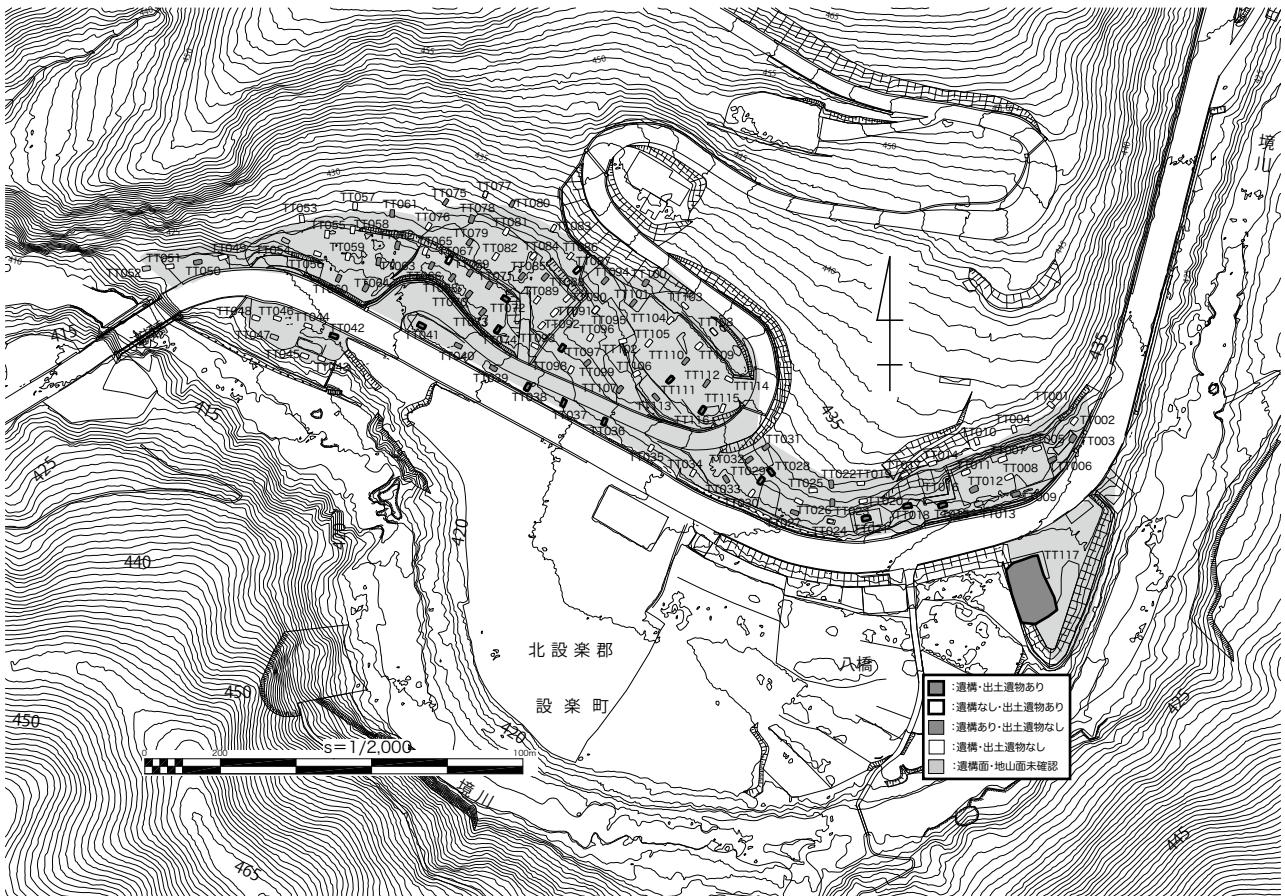
県道の南で遺跡の東端にあるTT117では、発掘調査の16A区に隣接する地点で、縄文土器や黒曜石剥片、安山岩礫、凝灰岩礫などが多数出土し、土坑15基を検出した。よって遺跡の東端は調査対象範囲の東端部に至る可能性がある。(蔭山誠一)



TT072遺構検出状況(北西から)



TT117遺構検出状況(北から)



滝瀬遺跡範囲確認調査トレンチ配置図(1:2,000)

永江沢遺跡(範囲確認調査)

所在地 北設楽郡設楽町八橋字崩沢、下當門
(北緯35度6分26秒 東経137度33分54秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年5月

調査面積 124㎡

担当者 酒井俊彦・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年5月に行った。調査対象地の現況は、南西から北東へ下る耕作地と宅地跡である。

立地と環境 遺跡は、八橋地区にある。境川と天堤川の合流点から南へ延びる谷地形の東向き斜面に立地する。斜面地は南北約300mに及び、北端の長江沢橋付近は河川堆積による平坦面となっている。天堤川はこの斜面を迂回するように流れているが、「崩沢」という地名があることから、比較的最近の斜面崩壊によってできた地形と考えられる。

調査の概要 範囲確認調査は、平成27年度の調査対象地から下位の斜面地で行われた。トレンチは全て1×2mである。林道付近から斜面上位では、近世の遺物が若干出土していたが、今年度はTT013・021・031・043・050・055で近世後半を中心とする時期の陶磁器が出土した程度である。また顕著な遺構もなく、土層は耕作土直下で礫混じりのシルト層がみられる。この層は斜面崩壊に関わるものと推測され、これが広範囲にみられることから、遺跡はあまり良好な残存状態ではないと考えられる。

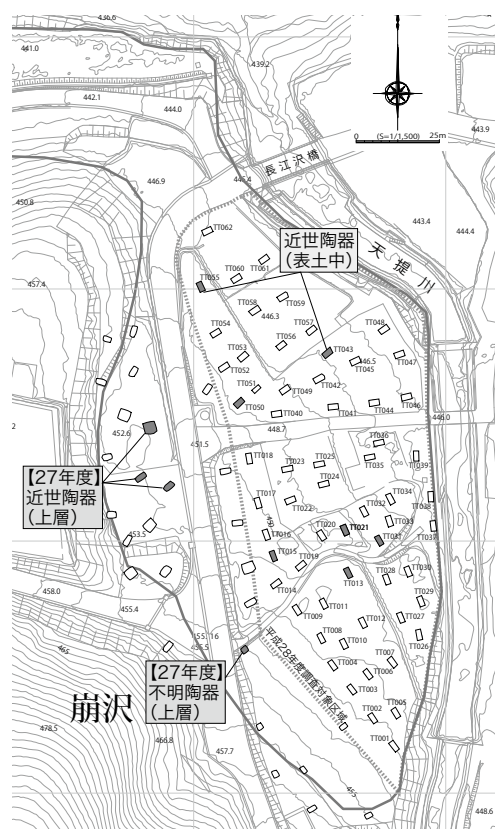
(永井邦仁)



遺跡南部の現況(北西から)



調査風景(西から)



永江沢遺跡範囲確認調査成果(1:1,500)

